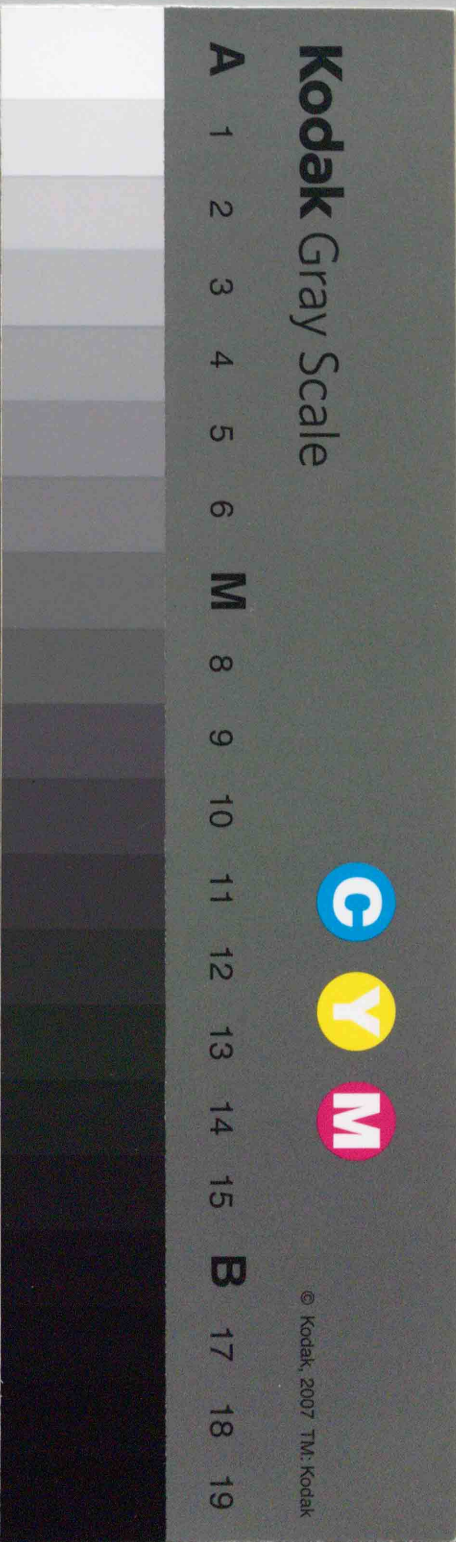
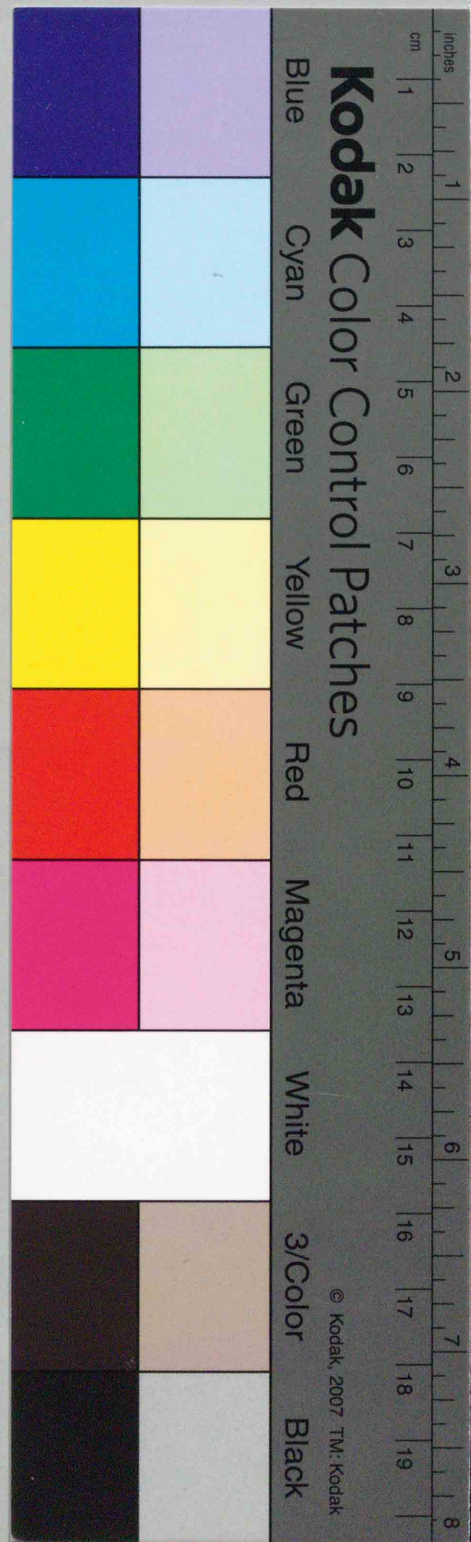
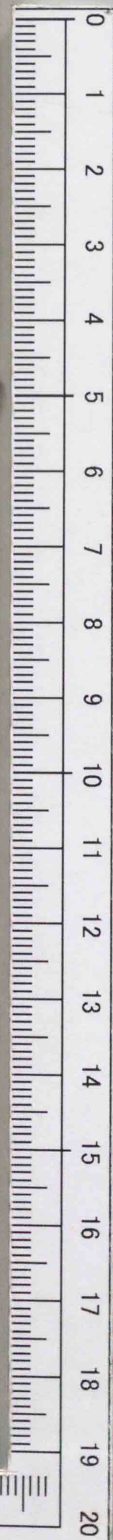


訂改
帝國新讀本
卷八

375.9
Ha7
資料室



41581

教科書文庫

4
810
41-1927
2000301551

727



資料室

375.9
Ha7

文部省檢定

中學國語科用

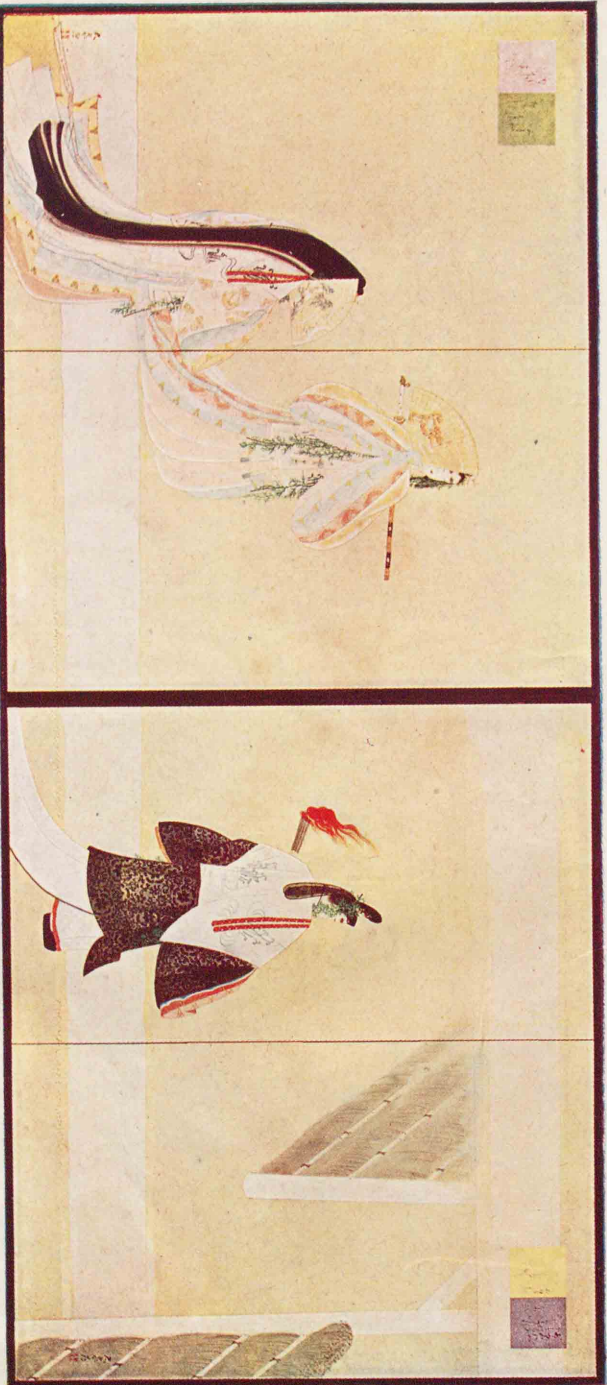
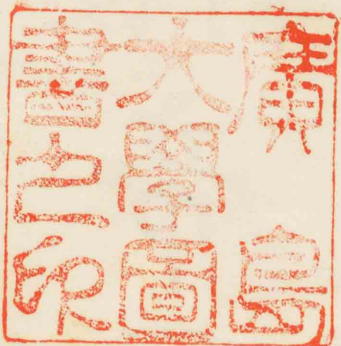
昭和二年十月二十七日

文學博士芳賀矢一編

改訂
帝國新讀本

東京

合資會社
富山房發兌



大嘗祭

大嘗祭 獲生天皇 泉雅

訂改 帝國新讀本 卷八目次

一	天地動く……………	小林一郎……………	一
二	日本の國體……………	……………	四
	大嘗祭(自修文)……………	……………	一〇
三	百蟲譜……………	横井也有……………	一五
四	一事一心……………	吉田兼好……………	一六
五	草ぼうき……………	永井荷風……………	二二
六	美術に現れた日本國民性その一……………	藤懸靜也……………	二七
七	美術に現れた日本國民性その二……………	藤懸靜也……………	三三
八	熊野落……………	(太平記)……………	三九
九	ロンドン塔……………	夏目漱石……………	四〇

目次

一〇 枯野(俳句).....五
 二 芭蕉翁の臨終.....(花屋日記).....五
 芭蕉の生活とその俳句(自修文).....萩原井泉水.....五
 三 十六夜日記.....阿佛尼.....六
 三 光頼参内.....(平治物語).....七
 四 待賢門の戦その一.....(平治物語).....七
 五 待賢門の戦その二.....(平治物語).....八
 六 檀園文抄.....中島廣足.....六
 一 書.....八
 二 夕.....九
 三 山家の興.....九
 一七 歳暮.....鳥野幸次.....九
 冬の風物(自修文).....佐々木信綱.....九

一六 今様三題.....一〇一
 一六 安宅その一.....(謠曲).....一〇三
 一六 安宅その二.....(謠曲).....一〇八
 二 小謡.....(謠曲).....一五
 三 人格の表出.....倉田百三.....二八
 三 麒麟その一.....谷崎潤一郎.....三四
 四 麒麟その二.....谷崎潤一郎.....三三
 孔子の故郷(自修文).....澁川玄耳.....四〇
 三 小野の御室.....(伊勢物語).....四
 三 あげ雲雀(俳句).....一四
 三 雨の興.....松平定信.....一四
 六 春と人.....上田敏.....一五
 坐り(自修文).....山本有三.....一五

元 我が國の文化……………笹川臨風…一六
 三 おどろの下……………(増) 鏡…一七



訂改 帝國新讀本 卷八

一 天地動く

小林 一郎

精氣あつま鍾りて力となり、
 心靈發して聲となる。
 心靈は遠く天に翔り、
 精氣は深く地に透る。
 鍾つて力となれば、
 その力やがて外に溢る。
 發して能く聲となれば、
 その聲に偉いなる力充つ。

一 天地動く

言へば人必ず聴く。
 聴けば人必ず動く。
 天の神もまた聴くか、
 雲靡き、風動く。
 地の靈もまた聴くか、
 海どよみ、山響く。
 この時我と人と一なり、
 我と天地とまた一なり。
 能く劔を揮ふものは、
 劔もなくまた人もなく、
 動くはたゞ心の靈のみ。
 能く馬を御するものは、
 馬もなくまた我もなく、

馳するはたゞ精氣のみ。
 人を動かすは聲にあらず。
 世を動かすは言にあらず。
 聲の外に眞の聲あり、
 源を我が心に發す。
 言の底に眞の言あり、
 根を我が誠に存す。
 心は相照らし、誠は相應す。
 世も動き、人も動き、
 天も地もまた動く。
 偉いなるかな、貴きかな。

二 日本の國體

亨 賀 貞 矢

Stiebold.
ドイツの人。
日本の外務省
にあつたことが
ある。

余がドイツ留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり、日本の勳章を帶びて居る男爵ジールボルト氏の演説を聽いて感じたことがある。それは、西洋各國の革命は國王に對する不滿から起つて、その結果はいつも王室の權威を縮小し、或は全く王室を顛覆するのであるが、日本のはこれに反して、改革毎に稜威を増し、繁榮を増進する。といふ説であつた。これは、いかにもよく我が國體の萬國に異なることを言明したものである。

かの大化の改新といひ、明治の維新といふ如き政治上の大變動は、我が國なればこそ極めて容易に成就したのである。新しい文化に接してこれを採用する必要の生じた時、制度改正の詔勅が一度煥發すれば、祖先以來の領土領民を差出し、既得の權利をも悉くう

煥發す

唯々諾々

ち棄てて、唯々諾々として大命を承るといふことは、決して外國には有得べからざる事實である。これでこそ我が國民は萬世一系といふ國體を維持し、時代の進歩に伴なつて進歩したのである。かういふ場合には、外國では必ず國王と國民との衝突を免れぬ。衝突して國王が散々な目にあはされた例は、枚擧に遑ないほどである。元來、革命といふ語は、易に湯武革命、順乎天而應乎人。とある語から出たので、支那人は昔から天子は天の命を受けて百姓を治めるものといふ思想をもつて居る故、聖人賢者たる以上は、誰が代つて天子になつても構はぬのである。これが爲に歴代二十六朝、長い朝廷でも六百年とは續かぬ。その時には天の命が革つたものと覺悟して、平氣で新しい天子を戴く。かういふ國々には、決して大化の改新や、明治維新のやうな改革が行はれるはずはない。西洋諸國の帝王も、支那の天子も、國民の間から起つて、或は權力

興望
素性

(一) 壯士不_レ死即
已_レ死_レ即_レ事_レ大
名_一耳_一。王侯將
相寧有_レ種乎_一。
史記

覬覦す

(二) 徳川光圀の撰。

(三) 河内の人。禪
師_一孝謙_一(稱徳)
天皇に仕へた。

を以て、或は興望によつて、遂にその位を贏ち得たのである。素性を洗ひ、祖先を正せば、同等な國民である。これが他の國民の王室に對する考であらう。日本人は皇室を我々國民とは一種別なものとして居る。支那には、王侯將相寧有種乎^(一)といふ語があるが、日本人は帝王の位は國民の決して覬覦すべきものでないと、祖先以來考へて居る。長い歴史の中には、皇室に向かつて弓を引いたものもないではないが、天子の位をねらはうといふやうな考を起したものは決してない。大日本史には、源義朝や源義仲が叛臣傳に入れてある。これは天子に向かつて敵對したことの**大義名分**を正したのである。これ等の人は、多くは朝廷の或官位を得ようとして、それが得られぬ爲に騒動を起したので、皇室を覆さうなどいふ考は毛頭もないのである。叛臣と雖も、朝廷の尊さを忘れぬのである。平將門も檢非違使になれなかつた爲に謀叛したのである。たゞ一人弓削道鏡

(一) 大分縣(豊前
國)宇佐郡宇
佐町に在る宇
佐神宮。

廢立

(二) 藤原道長の歌。



(筆響林井石)

といふ僧が、佛教、王法を一つにして、自分がその位に坐らうといふ不届な料簡を起したが、忠誠な臣民の聲は宇佐八幡の神託となつて、忽ちこれを排斥した。その氣外には一人もない。藤原氏が廢立を行つたといつても、自磨分の女の生んだ皇子を皇位に即かせたといふ欲望なので、これが即ち人間としての最大欲望であつた。その欲望さへ達すれば、^(一)この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へばといつて、大満足をしたのである。

平清盛は利己主義の結晶で、入る日を招き返したといふ傳説のあるほどであるが、これとても、平氏といふ家柄で太政大臣といふ人臣の極位に上つたのを、家門の大名譽と信じたのである。彼のわがま、が募つて法皇を幽閉しようとした時、小松内府が先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。

と諫めたので、入道も弱りきつて、その言に従つたのである。

承久の役には、北條泰時がわざわざ途中から引返して、若し道のほとりにも、はからざるに忝く鳳輦を先立てて御旗を揚げられ、臨幸の嚴重なることもはべらんに参りあへらば、その時の進退いかかはべるべからん。この一ことを尋ね申さんとて、

一人馳歸りはべりき。

といふに對して、義時は

賢くも問へるをのこかな。そのことなり。正に君の御輿に向かひて弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は、胄を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。

と答へた。

吉野朝時代の足利尊氏にしても、たゞ征夷大將軍だけの野心で、皇室を陥れようなどといふ非望はもつてゐなかつた。我が國の戦亂を支那歴代の戦亂などと同様に見るのは、大きな間違といはなければならぬ。いかなる悪人でも、謀叛人でも、皇室を尊ぶ者は必ずもつてゐたのであつて、支那や西洋諸國の國民のやうに、をりがよくば取つて代らうなどといふ考の如きは、毛頭微塵ないのである。これが外國人の眼からは不審に見える。我が國民の性質を知ら

(一)泰時の父。

- (1) Bourbon 朝 フランスの王朝
- (2) Hohenzollern 朝 ドイツの王朝
- (3) Romanoff ロシアの王朝
- (4) 支那の漢時代
- (5) 支那の唐時代
- (6) 支那の清時代

金言

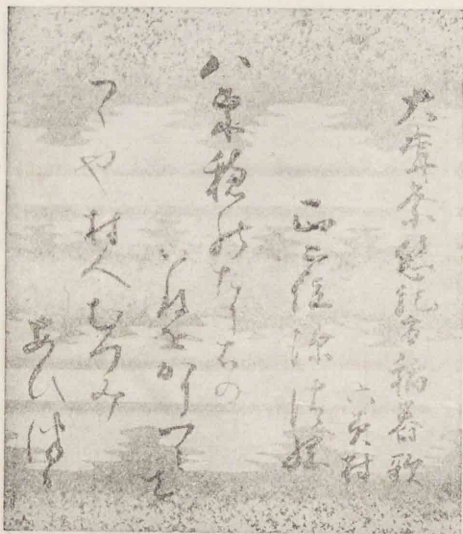
- (7) 大正四年十一月
- (8) もと上皇の御所。今御苑の東に在る
- (9) 天皇即位後、新穀を以て皇祖皇宗を始め天神地祇を祭祀給ふ儀式

ぬ人の眼からは、萬世一系といふことが、いかにも不可思議に感じられる。世界に唯一であるから、もとより不思議には相違ない。ブルボンだの、ホーヘンツォルレルンだの、ロマノフだの、劉氏だの、李氏だの、愛親覺羅氏だのと、外國の朝家にはそれぞれ姓や朝號があるが、我が皇室にはそれが無い。ここの道理がわからなければ、日本の歴史を理解することはできない。開闢以來、君臣の分定まされり。といふことは、別段歴史上の説明を待たなくとも、有史以前から我が民族の腦裏に浸みわたつてゐた金言である。

大嘗祭〔自修文〕

(7) 十日の即位禮から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへできた。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所に參集。世界に類のない森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、眩いほどの電燈の光、一々

- (一) 南方に板で作つた門
- (二) 庭上に幕を張りまはした小舎
- 庭療 庭上でたく火ぬばたま
- 「黒い」または「暗い」などの枕詞
- 大嘗祭悠紀 方稻春歌紀
- 正六位 源清綱
- 八束穂のたねをかりつみ
- てをつくりつみ
- 人をむつみ
- ひつみ
- 稲春歌 大嘗祭に神に供へる米を春に特作歌ふ爲に
- 歌に挿入した
- それである
- 網子爵田清
- 爲守とある
- 悠紀とは大嘗



黒田清綱詠並びに筆

呼上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて、大嘗宮南板垣門内の幄舎(一)に着席する。電燈を籠めた數個の燈籠がほんのりと明る。大嘗宮の柴垣が微かに認められるだけである。火焚屋に燃える庭療は、時に明るく、時に暗い。一同の着席が済むと、薄明るい燈籠の火も消されて、ぬばたまの闇の夜である。

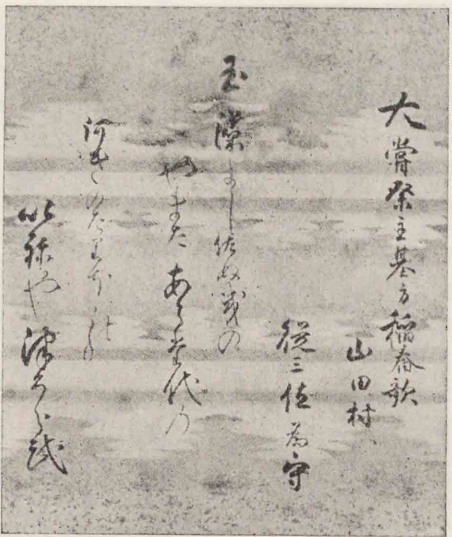
一聲長い笛の音が樂舎から起つて、稲春歌が高らかに吟ぜられる。徐におごそかな調子で、神々しさが身にしむやうである。稲春歌が終つて、少しばしのほどを経て再び歌聲が起る。今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。續いて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が「起立」「着席」を呼ぶ毎に、或は起立し、或は着座する。闇に包まれた千餘人の參列員は、端坐凝念して、身はさながら神代の昔に返つた心地

祭の時天神を祀る方。地主を祀る方。地祇を祀る方。
(三)大和の地名。國風とは歌のこゝろで、應神天皇の時に吉野の國栖人が吉野酒をかもしてつぐつたのに基

大嘗祭主基
方稻春歌
從三位
山田村

玉藻よし守
ぬきのやま
のあきのた
のあきのた
りほのいた
やつくらん

風俗歌
雅樂に用ひた
歌曲の一種
端坐凝念
正しく坐つて
一念をこらす
こと。
(一)祭を掌る長官
この時は岩倉



入江爲守詠並びに筆

た大嘗宮の中に行はれて居るのである。かくて悠紀殿の御祭が終つたのは十一時二十分の頃であつた。朝集所へ立戻つて夜食を賜はる。暖かい御酒、熱い吸物、幾たびか朱の御盃

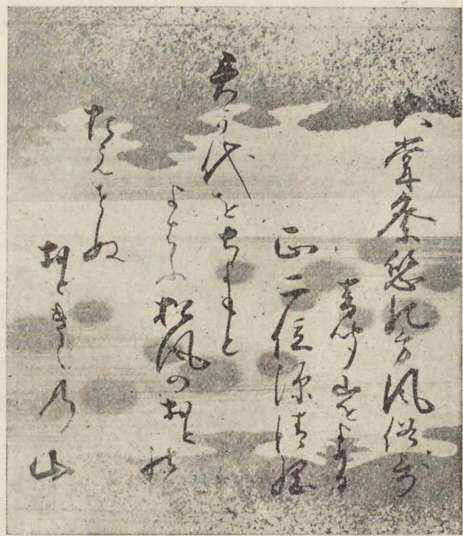
具綱
(二)天皇が御湯を召し御衣を着かへ給ふ所。
(三)宵に行はれるので宵の御祭ともいふ。主基殿の御祭といふ。曉の御祭といふ。

大嘗祭悠紀
方風俗歌
音聞山を
よめる
正二位
源清綱

君か代をち
よもとよは
ふ松風のお
とのたえせ
ぬおとき
の山

(一)十日朝九時半頃から春興殿式で行はれた儀

臣僚
臣下



黒田清綱詠並びに筆

を傾けて、夜寒も忘れはてる。十五日の午前一時三十分、再び幄舎の座に着く。老齢の大官たちは拜辭して退下した爲であらう、幄舎の座席は以前より廣く覺える。このたびは樂舎が近いので、歌樂の音も一層鮮かに聞える。曉の寒さは三十分、一時間、次第に身に浸むとともに、嚴肅な気分は一層に加る。樂の音が止んで御祭のはてたのは、午前五時二十分であつた。朝集所に退下して、再び御酒御食を賜はる頃、東の空は漸く明るくなつた。十日の即位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉く參列した。それは朝日の輝く御宮、夕日の照らす大庭に行はれたので、莊嚴であり雄大であつた。それに引替へて大嘗の大御祭は、夜陰の中に行はせられる。參列の臣僚は柴垣を隔てて、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍

錦旗
にしきのみは
た。

(一)孝明天皇の安
政元年。

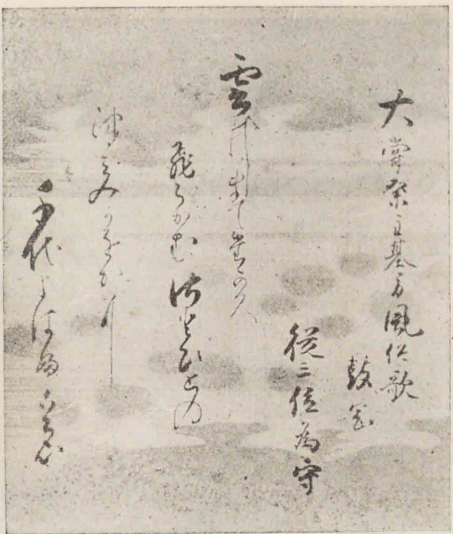
大嘗祭主基
方風俗歌
從三位 岡

雲井 爲守
從三位

かくひと
むさとひと
のつみか
をかにつか
よはふこゑ

いそのかみ
一ふるの枕詞。

坐するのである。たゞ「森嚴」といひ「神々しい」といふより外に形容の語はない。即位の大禮に於ても、遠い國史を想ふの念は油然として湧いた。春興殿前の威儀の人、紫宸殿前の大小錦旗、古い國史の跡を考へて、愈々國家の昌運を欣慶するの情に堪へず、今より六十餘年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。この太古の儀によらせられた大嘗祭に於ては、更に國史の各時代を超越して、西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入つて來ない神代の昔を



入江爲守詠並に筆

追念して、我が國體の尊嚴無比なことを今更のやうに感激するのであつた。

いそのかみ古りし神代の神わざを
をろがみまつるけふのかしこさ

(一)莊子に「昔者
莊周夢爲胡
蝶云々」と
ある。
(二)古今集序「花
になく鶯水に
すむ蛙の聲を
きけば、生き
のし生けるも
の、いづれか
歌をよまざり
ける云々」
(三)「古池やかは
つとびこむ水
の音」(芭蕉)
(四)「やがて死の
けしきは見え
ず蟬の聲」
(芭蕉)

三 百蟲譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ、なほめでたけれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものこと更にも誇り難し。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。稍日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞る心地す。されば初蝶とも、初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ、大きな手がらなれ。やがて死ぬ氣色は見えず」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

すだく
晋の車胤。

螢はたぐふものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのもの爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。つくつくぼふしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。世の諺にいへりけり。あはれは蜀魄の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すにか。蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼食ふ蟲はもの好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。



竹の林の七賢 (狩野元信筆)

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原、吉原を、駕籠に乗りて富士を眺め行く人には似たり。

機織、鈴蟲、轡蟲は、その音の似たるをもて名に呼べり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を

(一)「秋風に結び
つらし藤袴
ふきりきりす
なく」(古今
集、在原棟梁)

(二)「あまの刈る
藻にすむ蟲の
われからと、
音をこそ鳴か
め世をば怨み
じ」(古今集、
藤原直子)

(三)晋の嵇康の交
つた奇士。阮
籍、山濤、向秀、
劉伶、阮咸、王
戎、所謂竹林
の七賢である。

因果の理
世渡るたづき

事とす。これ松蟲の類なるべし。
きりぎりすのつゞりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻にすむ蟲
はわれからと、たゞ身の上を歎くらんを、蓑蟲のちよと呼ぶは、い
と優しげなり。されど、父のみこひて、なかは母を慕はざるらん。
蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕べ、始め
てほのかに聞きたらん、または長月の頃力なく残りたるは、寂しき
方もあり。蚊屋つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、かつは風
雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜話には、
いかに團扇のひまなかりけん。
——鶉衣——

四 一事一心

吉田兼好

或者子を法師になして、學問して因果の理をも知り、説經ななど
して世渡るたづきともせよ。」といひければ、教のまゝに説經師にな

桃尻

千五百番歌
會によませ
給ける
院後鳥羽
御歌

あしのやの
なたのしほ
くむあまひ
ともしほ
に袖のいと
まなきまで
境に入る

あられます

らん爲に、まづ馬に乗習ひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられん
時、馬などにて迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かる
べしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むることあらんに、法師
の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふこと
を習ひけり。
この業やう
やう境に入
りければ、愈

あしのやのなたのしほくむあまひともしほに袖のいとまなきまで境に入る

吉田兼好筆蹟

よくしたく覺えて嗜みけるほどに、説經習ふべき閑なくて年より
にけり。

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこのことあり。若きは
どは諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問
をもせんと、行末久しくあられますことども、心にはかけながら、世を

のどかに思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前のことにのみ紛れて月日を送れば、ことごとくなすことなくして身は老いぬ。終にももの上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取返さるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如く衰へ行く。されば一生のうち、むねとあらまほしからんことのなかに、いづれか優るとよく思ひくらべて、第一のことを案じ定めて、その外は思ひ捨てて一事を勵むべし。一日の中、一時の中にも、數多のこの外來らんなかに、少しも益の優らんことを營みて、その外をばうち捨てて、大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。例へば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人に先だちて小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨てて十の石につくことは易し。十を捨てて十一につくことは難し。一つなりとも優らん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜し

く覺えて、多く優らぬ石には換へにくし。此をも捨てず、彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず、此をも失ふべき道なり。

京に住む人、急ぎて東山に用ありてすでに行着きたりとも、西山に行きてその益優るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。ここまで來着きぬれば、この事をばまづいひて、日をさゝぬことなれば、西山の事は歸りてまたこそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠、即ち一生の懈怠となる。これをおそるべし。一事を必ず成さんと思はば、他の事の敗るゝをもいたむべからず。人の嘲をも耻づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。

—徒然草—

五 草ばうき

永井 荷風

白日門を閉じて、獨り閑庭に飛花落葉を掃ふ時の心ほど、我なが

白日

ら懐かしきはなし。

飛花は春に限らず、落葉また獨り秋のみならんや。山茶花の落つる時、冬漸く寒く、八手の花、雪ならぬ雪を降らせば、くちなしの實、落霜紅と共に愈、赤し。梅、櫻、桃、李の眺きのふと過ぎ、垣には卯の花の雪積りて、藤棚のかげに紫の房もやうやう落ちつくせば、雀の子すでに巢立して、あたりは夏なり。五月、松の花は閑庭の苔に金砂を撒き、七月、石榴の花は綠蔭に緋の毛氈をのぶ。

落葉は新樹の綠潮の如く湧出づる時より、庭の隅々、垣の際に掃きつくせぬばかり堆し。これ去年一冬の霜を忍びし椎、檜、楨、かなめの如き常磐木の古葉、若芽の伸ぶるに隨ひ、風をも待たで落散るなり。春盡きんとして雨多く、世には流行風邪の噂もありて、一重の小袖俄に薄寒き夕暮など、かゝる常磐木の落葉窓の障子にはらはらと音づるれば、心は忽ち時雨の夕べに異ならず、思はずとものこと

常磐木

ども、何くれとなく思ひ出さる。

かなめの古葉の落ちんとする時、秋の楓の如く紅となり、青葉に交りてちらほら花の如く目立ちて見ゆる、風情あり。竹の落葉に夏の暑さは漸く烈しく、檜、椎の古葉は土用に入りてもなほ散りやまず。とかくするうち早くも秋立ちて、芭蕉の葉破れ、桐の葉落つ。

桐の一葉に秋を知るとは誰もいふことなれど、桐よりも早く散落つるは梅、櫻の葉なるべし。桐の中にも碧梧の如きは、十月の半ばその葉黄ばみて、なほ枝上に留れるを見ること珍しからず。

柳も梧葉、荷葉、芭蕉と共に秋には脆きものの中に數へられたれど、初冬十一月、山茶花もはや咲出でんとするに、御堀の柳を見れば、青き葉なほ落ちつくさざることあり。

年中の景物、凡そ首夏の新樹と晩秋の黄葉といづれをか選ぶべき。この時節両つながら夕陽甚だ美なり。一は密葉の間を染めて友

夕陽
レ
レ
レ

禪の如く、一は黄葉に映じて錦繡の如し。然れども新緑は花にも似て束の間の眺なり。その軟かき緑は長からず。梅雨晴の日の光漸く強くなり行くに随ひ、緑は黒ずみて、終に盛夏の塵を浴ぶ。やがていつともなく朝夕の寒さ身にしみ來れば、風うち騒ぐ梢のいたゞきより、木の葉はその縁漸く黄ばみ出して、次第に日蔭の小枝にも及ぶほどに、初に色變へし木の葉、まづひらひらと閃き落つ。

去年の秋より冬へかけて、われ人なき庭にたゞ一人落葉掃きつ、木々の梢の色變り行くさま仔細にうち眺め、徒然の餘り手帳に控へ置きけり。春より夏にかけて若芽、青葉の緑、木々により濃淡強弱さまざまに湧出づるを、若し西洋の音樂に譬へて、緑の管絃樂とも名づけ得たらんには、憔悴の詩情いひ難き黄葉の管絃樂は、まづ十月よりその序曲をば奏で出づるなり。

梅櫻は盛夏の候早く病葉の黄ばみ落つること多けれど、そは數

白葉
長恨
行

へざるべし。後の彼岸に残暑も今は全く去りぬる夕べ、碧梧、枌、槐の葉はいつしかうち黄ばみたり。我が庭に一樹の木蘭あり。木蘭は人その花をのみ愛づれども、黄葉またなかなか棄難し。檜の高き梢に百舌啼叫ぶ十月となるや、大きな榎の如き木蘭の葉は、淡くほのかに黄ばみ出づ。その色、曇りし日の夕まぐれ、夜將に來らんとする境には、白く影の如くに浮立つさまは、かなくもまた哀なり。さても十一月となり、冬愈、迫り來れば、色淡き黄葉は次第に褐色となるより早く枝を去るなり。

萩もわれ花のみならで、枯行く葉をも愛づ。十月半ばより萩の葉は黄ばむと共に散りかけて、十一月に至れば、一葉をも留めず、凋落まことに早し。これに比ぶれば、秋草の中にて葉鶏頭の十一月半ば菊花盛の頃まで衰へながら立ちすくみたる、潯陽江頭琵琶に泣く棄婦の心にも喩へつべし。

藤棚に藤の葉の淺く黄ばみたるも趣あり。臘梅の黄葉は黄昏の微光を得て哀いと深く、さいかちの細き葉は落花に異ならず、榎の落葉はそゞろに驛路の鈴響く街道の夕べを思はしむ。これ皆十一月の光景にして、この月柿の葉紅に染まり、蔦の葉また赤し。

楓葉は菊花と並びて可憐の秋をなすこといはずもあれ、公孫樹の黄葉また初冬十一月の美しき眺をつくる。ここに石榴の黄葉看來れば、その美敢へて公孫樹に劣るものならず。石榴の葉は柳の如く細きが、晚風に誘はれて、紛々として雨の如く散落つるや、滿地皆黄色となり、短き日の暮れつくして、常磐木の木蔭いち早く暗くなり行くに、石榴の葉散敷く所のみ長く暮れやらねば、月の光照添へるかと疑はる。この葉池の水に散積りて朽ちたる藻を蔽へば、いづれか水、いづれか岸とも見えわかず、敗荷、殘柳と相俟つて、蕭條たる池邊の廢趣愈深し。

楓
榎

楓葉は蓋し搖落の殿をなすものなり。菊花凋みつくして、臘梅の蕾點々數へ來らんとする時、常磐木の蔭に木枯をよけては、極月なほ楓葉の枝にあるを見ることあり。されど冬至に及びてあらゆる樹木愈々葉なきに至れば、菊は早くその切株に新緑の芽を生じ、水仙の葉また三四寸も伸びて、春風を待てり。園居年々景物相同じ、然れども看來つて常に興新たなれば、草木のよく人を幸ならしむること、蓋し黄金にも優れりといふべきか。

—荷風全集—

六 美術に現れた日本國民性 その一

藤懸 靜也

美術は一國文明の華の開いたものであつて、一國の文化はその國民性を背景とするに至つて、始めてその光輝を發するものである。過去を顧れば、一國の文化には、その國民性を背景とした大きな

流が明瞭に認められる。
 現代に於ては、自身がその社會の渦中にあつて、いろいろな文化の傾向を見てゐる爲に、いかなる文化が眞にその國民性に適應すべきものか判定に苦しむことがある。例へば、繪畫に例を取るならば、舊來の日本畫と油繪とに於て、青年は油繪の方が日本の國民性に適するといふかも知れないし、中年以上のもは、日本畫の方が適するだらうと考へるかも知れない。しかし、それは人々の考へやうで、歐米の思想や文物に多く親しんでゐる人々には油繪が好まれ、中年以上で多く日本のものを見てゐる人には日本畫が好まれるのである。それ故、吾人は趣味の偏した人の説を避けて、日本國民全體の上から、その文化や趣味の傾向を別に考へねばならぬ。それには過去の時代に溯つて、その時々々の文化の變遷を見、藝術の變化の跡を尋ねると、美術に現れた日本國民性のいかなるものなるか

(一)西曆四二〇年
 まで五八九年
 間の六つに支那
 那で六つに朝鮮
 廷が興亡した朝
 代に起つた藝術
 の様式

をも考察することができ。いざ吾人をして、我が日本の古い時代からの繪畫の變遷について一瞥せしめよ。
 さて我が國の古代にいかなる藝術をもつてゐたか、遺作が極めて乏しいので、委しいことはわからないが、元來我が國民は風光明媚な山川の風趣に恵まれて、藝術をよく理解し、味はふ力をもつてゐた。それ故一度優れた大陸藝術に接すると、勃然として藝術の振興を見、自己獨得の長所を發揮するに至つたのである。
 我が國に遺存する最古の優秀な藝術品としては、推古時代のもを挙げねばならぬ。これ等の藝術品には、内地で作られたものもあれば、外國から傳來したものもある。しかし、いづれにしても、所謂六朝式のもので、いふまでもなく、聖徳太子の偉大な力によつて興隆したのである。太子がその當時でき得る限り大陸の文明を吸収して、我が國の文化開發につくされたのは、我が國の文明と隆運と

を開かれたもとである。この時に於ける我が文明の變化は、明治維新の時に際し、歐米文明の影響を受けて變化したよりも更に著しく、大陸文明に化せられたことであらう。大和の法隆寺及びその寶物を見ると、當時の盛觀がしのばれるのである。

次の奈良時代は所謂天平期を最盛の時期とし、建築にも、彫刻にも、驚くべき發達を遂げた。これ即ち唐朝の進んだ文明が、直接我が國にはいつたからである。推古時代の美術が一躍して奈良時代の美術になるには、その變化が餘りに大き過ぎるけれども、支那では六朝式から隋の過渡期を経て唐朝式となつたのである。今我が國では六朝式を朝鮮から入れて、次に直接に唐の美術を輸入したので、推古時代と奈良時代との美術に著しい相違を來したのである。唐の文化が入れば、世はまたこの新文明を追うて、すべての建築調度類から、日常生活の様子まで、唐風になつたであらう。随つて支那

(一)六朝の次の時代。西曆五八九年から六一七年まで。
(二)西曆六一八年から九二二年まで。我が推古天皇から醍醐天皇まで。

蒙昧

思想もまた著しく我が思想界を風靡したに違ひない。しかし、かやうな風潮に乗じたのは、その當時に於ける宮廷及び貴族の一部のみであつた。都會を一步離れば、國民の文化は極めて低い。無智蒙昧なものも多かつたであらう。しかし、この唐朝文化の影響によつて、我が文化の根柢は益堅くなつた。

平安時代の初期はなほ唐の影響を受けてゐたが、その中期から、日本國民としての自覺を喚び起し、外國文明から離れて、我が國の特色ある文明をなすに至つたのである。これ實に我が文化の尊い所以である。その頃から國文學が起つて、漢文學に對立するやうになり、藝術に於ても、支那には見ることもできない特殊な流風が起つて、更に鎌倉時代にこれを完成した。して見ると、我が日本文化の基礎は、はやく古代からあつたのであるが、推古及び奈良時代に外國の影響を受け、それを純日本化して、我が國獨得の精華を發揮し

播紳

(一)有名な佛師。後一條天皇から後一條天皇頃の人。
 (二)有名な佛師。名は譽、備中法師と號し、東大寺佛師に補せられてゐた。後鳥羽、順徳天皇頃の人。
 (三)運慶の子。佛像彫刻や佛畫をかよくした。後堀河天皇頃の人。

佛師の彫刻家

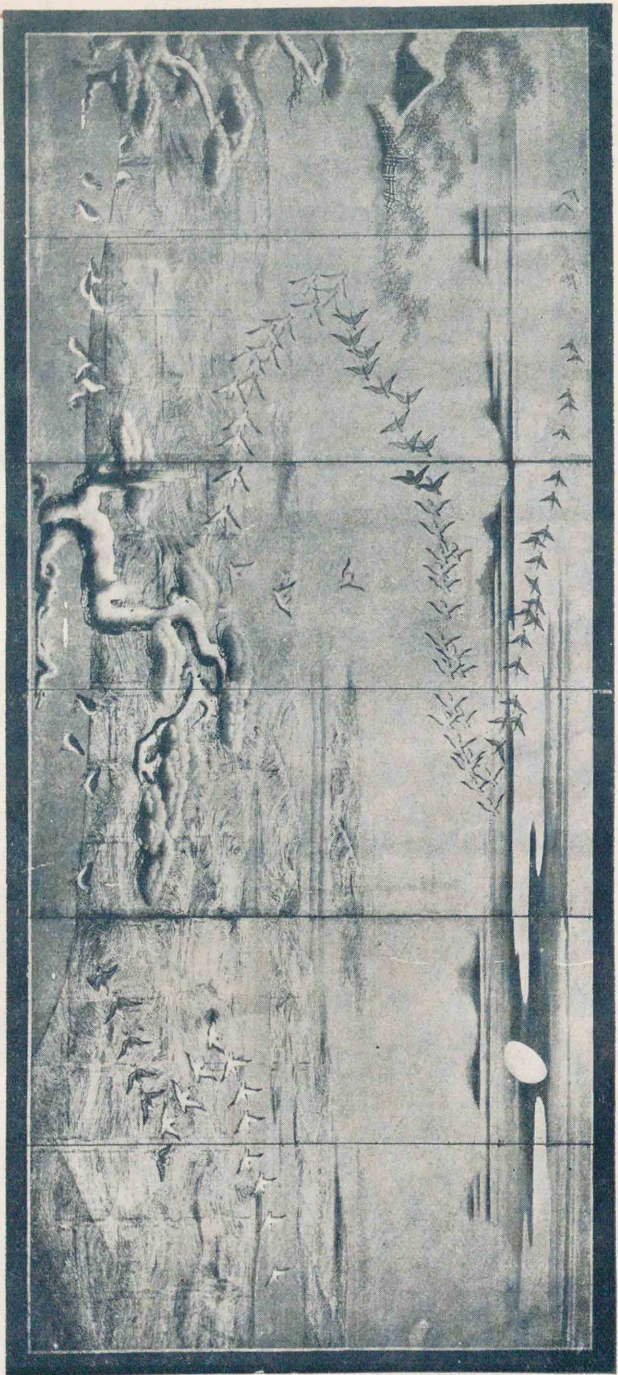
たのは、平安及び鎌倉時代である。

平安時代は、宮廷及び播紳たちの文化であつたが、鎌倉時代には更にその範圍が廣まつて普遍的性質を帯び、國民的藝術の發達に向かつたのである。彫刻についていへば、天平時代はその精を極め



運慶作仁王
(東大寺南大門)

能をつくしてゐるが、これ實に唐朝彫刻の摸倣である。然るに平安時代の終りに定朝(じやうてう)が出で、鎌倉時代には運慶(二)、湛慶(三)が出て、木彫界に一大進展をなし、ここに純日本彫刻が出現した。またこれを繪畫の方で考へれば、早く佛畫は精妙な域に達してゐたけれども、平安時代に國文學の發達に關聯して、純鑑賞的の繪畫が現れた。この流は、平安の末から鎌倉初期に至つて益々榮え、遂に所謂大



兼雪山野翁

圖 兼水

和繪の一體を爲すに至つたのである。

七 美術に現れた日本國民性 その二

然るにその後鎌倉時代の末から足利時代へかけて、藝術界に特



雪舟畫像

殊な一派を生じた。即ち當時の新派で、支那からはいつて來た宋元水墨畫の一體で、禪宗趣味と關聯して、我が藝術に一新様を劃したのである。この派には如拙、周文、雪舟などの大家が出てその根柢を作り、狩野派が

榮え、曾我、雲谷諸派を生じ、舊來の大和繪は全く勢力を失つた。足利義滿から同義政の時代は、この流派の最も盛な時で、水墨減筆の一體が旺盛を極めたが、これまた當時の貴族たる武家の趣味から盛

- (一) 畫僧。足利義滿の時の人。
- (二) 畫僧。近江の人。如拙の門人。應永、永享頃の人。
- (三) 畫僧。名は等揚。備中の人。室町時代の人。
- (四) 明應頃狩野正信に始り、その子の元信は絶世の大家と稱せられた。
- (五) 曾我蛇足(應仁中の人)を祖とする。
- (六) 肥前の人雲谷中等顔(天正年中の人)を祖とする。

下剋上

徒手空拳

(一)織田信長及び豊臣氏治世時代の前者は信長の據城近江國(滋賀縣)蒲生郡安土城にあり、後者は山(山城國)紀伊(京都府)伏見郡桃山よつて稱せられる。

になつたのである。

然るに世は戰國時代となり、舊來の貴族が下々のものから滅され、所謂下剋上で、ここに日本の社會に一大變革を來した。即ち尾張の一農民が關白太政大臣となつて、一躍人臣の榮位を極めたのを始めとして、英雄豪傑は徒手空拳で一國一城の主となつた。これ等の人は天眞爛漫の趣味を發揮して、舊來の如き禪味を帯びた藝術では満足すべくもない。しかもこれ等の人々は支那の學問がなく、支那趣味を解しないから、俗眼を奪ふやうな華麗を極めたものでなければ喜ばない。ここに於てか、極彩色の花鳥動物などが描かれ、また當時の社會状態を描いた新しい風俗畫が起つたのである。されば、安土桃山時代は僅かに三十年間に過ぎなかつたけれども、近世藝術の基礎をおいた時期であるから、頗る重要な時代といはなければならぬ。しかもこの時代は、日本の文藝復興の時期とも

(一)尾形光琳。蒔繪師で、書をよくした。京都の人。享保元年(一七二〇)歿。年五十六。
(二)酒井文證。畫家。文政十一年(一八二八)歿。年六十八。
(三)應舉に始つた日本畫の一流。寫生を主とした。
(四)寛政の頃松村吳春(月溪)に始つた日本畫の一派。

稱することのできる時で、徳川時代の文化の基をなすものである。徳川三百年の間は、泰平の餘澤で、文學藝術は鬱然として興り、益々日本趣味の發展を遂げた。そして繪畫は殊に隆盛で、幾種もの流派を生じ、藝術の燦爛たる花の時期となり、我が日本藝術の盛な時代を現出したのである。

光悦に始り、宗達(一)、光琳を経て抱一(二)に至る一派の如きは、その範を大和繪に取り、更にこれを醇化したものである。また近世初期の風俗畫の一體の如きも、やはり範を鎌倉時代の繪卷物に取つてゐる。江戸趣味の上に作られた浮世繪版畫は、平民の藝術として頗る榮えた。その他圓山(三)、四條(四)の諸派も、徳川時代に於ける特殊な畫風である。僅かに長崎からはいつて來た西洋の畫風は餘り行はれず、支那の南宗畫は文人の間に行はれた。しかし、徳川時代は實に日本藝術の燦として華麗な花の開いた時である。

明治になつて西洋藝術の影響を受け、ここに日本藝術の上に一
大變革を來した。日本藝術は過去に長い歴史をもつてゐるので、一
時は外來の作風に傾いても、暫くして日本的趣味に復つた。現代は
各個人の考に依つて、思ひ思ひの藝術をなしてゐる。舊來の日本畫
も新來の油繪も共に榮えてゐるが、しかし、油繪も、日本に於て描か
れる以上は、日本の特色を發揮すべきで、外國のものとは違はねば
ならぬ。實に現代に於ては、日本的趣味に傾いたものが少くない。ま
た日本畫も舊來のものとは違つて、面目を一新した。

これを以て見ると、日本藝術は常に大陸藝術の影響を受けては
日本化し、更にまた大陸の影響を受けては日本化して進歩發達
したのであつて、現代の藝術もまた外國藝術を更に日本化するに
於て、優秀なものとなり、外國にも見ることでできない特殊な藝術
となるべきで、現にしかなりつゝあるのである。

此の如く外國の藝術を日本化するのには、即ち國民性を背景とし
ての大きな流があるからである。その文明は日本人の祖先以來承
繼いで來た獨得のもので、不知不識の間に日本人の趣味性格の上
に大なる影響を與へてゐるのである。古代よりの日本文化を觀察
すると、この大きな流が藝術の上に驚くべき力をもつてゐること
が明らかに認められる。しかし、藝術趣味はそれぞれ人々によつて
異なるのであるから、各その好に従つて藝術を賞鑑し製作すべき
である。各種の相異なる幾多の流風を生じて、始めてその國の藝術
は榮えるに至るのである。しかもよく一國の藝術として誇り得る
ものは、外國藝術の摸倣ではなくて、その國民の文化を背景とし、國
民性によつて作られた作物でなければならぬ。

これを要するに、一國の藝術は、その國民の藝術思想を表したも
ので、いひかへれば、國民性の表れである。國民性はその國民の文化

の程度によつて種々な相違を來すであらうが、またその國土の如何によつて、國民性の上にも大きな相違を生ずるであらう。實に國民性が國土の恩恵に支配されることは、蓋し少くないことであらうし、藝術もまた國土の恩恵に浴することは、蓋し莫大であらう。藝術上に於ける自然摸倣は頗る重要視されるが、自然摸倣の上には、國土の恩恵を最も考慮すべきである。

國土が一國文化の上に及す力が偉大であつて、國民性もまたその支配を受け、藝術もまた國土の恩恵に浴すとすれば、推古や奈良や足利の時代に外國藝術の影響を受け、その内容や形式の上に大きな變化を受けても、若干の時を過ぎれば、その國土固有の特色に復るのは疑のないところで、以上述べた事實がよくそれを證明してゐる。たとひ外國文化の影響に依つて、國民性に變化を生じて、決して外國文化そのものと同じにはならない。必ずやその國土の

力、國民性の力に依つて變化せしめられるのである。これ藝術がその國々に依つて異なり、時を異にすればまたその藝術にも大なる相違をなす所以である。そしてその間に動かすべからざる脈絡をもつのは、即ち國土の力と、その内に働いてゐる國民性の力とによるのである。

八 熊野落

^(一) 大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞き召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城すでに落^(三)ちて、主上囚れさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上^(四)に迫りて、天地廣しと雖も御身を隠さるべき所なく、日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を咎むる里の犬に御心を惱

(一) 後醍醐天皇の第三皇子護良親王。延暦寺の大塔に居られたので大塔宮といふ。
(二) 奈良市外にある。
(三) 元弘元年九月二十八日。
(四) 後醍醐天皇。虎の尾を履む恐、長夜に迷ふ鶉の床。

(一)奈良興福寺の北にあつた同寺の末寺の一

家人送る

まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されけるところに、^(一)一乘院の候人按察法眼好專いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

をりふし、宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵すでに寺内に討入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし、さらばよし自害せん」と思し召して、すでにおし肌脱がせ給ひたりけるが、事かなはざらん期に臨んで腹を切らんことはいと易かるべし。もしやと隠れて見ばや」と思し召しかへして、佛殿の



般若寺樓門

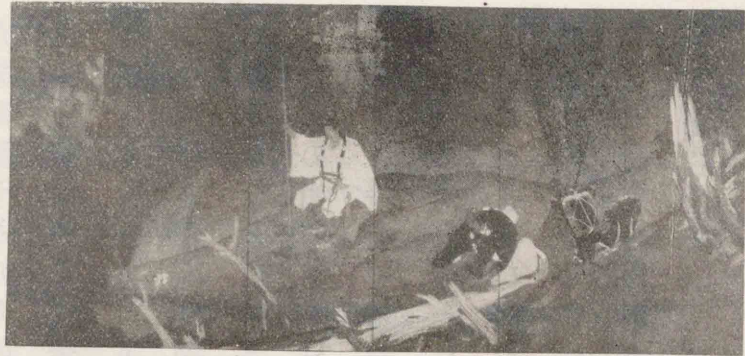
これ體

方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり二つの櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突立てんと思し召して、氷の如くなる刃をぬいて御腹にさし當て、兵、ここにこそ」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るもなほ淺かるべし。

さるほどに兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも残る所なく搜しけるが、餘りに索めかねて、これ體のものこそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ」とて、蓋したる櫃二つをあけて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋あけたる櫃は見るまでもなし。とて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給

夢に道行く心地

(一)支那唐代の高僧。印度に入り、大部の經文を持歸り、またそれ(西曆六〇二年)を漢譯した(西曆六六四年)冥應



一のそ(筆秋長田磯)落野熊の王親良護

ひ夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若しまた兵の立歸り委しく捜すこともやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。
案の如く兵どもまた佛殿に立歸り、前に蓋のあきたるを見ざりつるがおぼつかなし。とて、御經を皆うち移して見けるが、からからとうち笑ひて、大般若の櫃の中をよくよく捜したれば、大塔の宮はいらせ給はで、大唐の立辨三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、または十六善

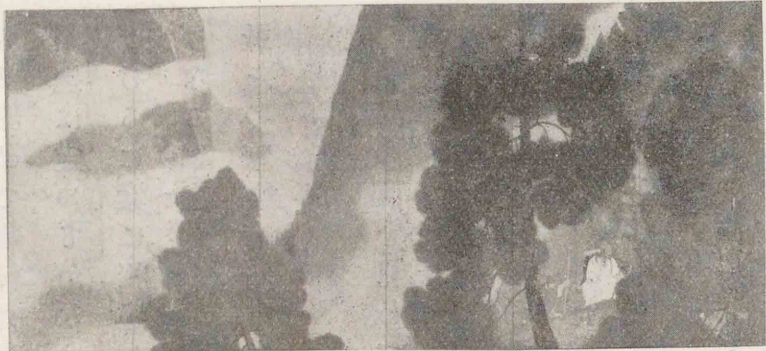
信心肝に銘ず

(一)紀伊國(和歌山縣)牟婁郡をひらく熊野といふ。

(二)則村の第三子。延暦寺の律師。初め護良親王に從ひ、後尊氏に叛き與した。

(三)義光。信濃の人。元弘三年(一九三三年)吉野城の陥らうとする時、大塔宮の身に代になつた。柿の衣

龍樓鳳闕



二のそ(筆秋長田磯)落野熊の王親良護

神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を潤ほせり。
かくては南都邊の御隱所^{おんかくれ}もかなひ難ければ、即ち般若寺を御出でありて熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林坊立尊、赤松律師、則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御供のものまでも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。
この君もとより龍樓鳳闕の内に人とな

華軒香車

勤修

(一)紀伊國(和歌山縣)日高郡にもあるが、ここは淡路國(兵庫縣)津名郡、和歌山對岸の港、濱のふ

(二)紀伊國(和歌山縣)海草郡

(三)海草郡和歌の浦

(四)共に、同所附近

長汀曲浦
雨を含める孤村の樹夕べを送る遠寺の鐘

(六)日高郡、今切目神社といふ、熊野大神の末社である。

御袖を片敷く

らせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚巾草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣宿々の御勤怠らせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

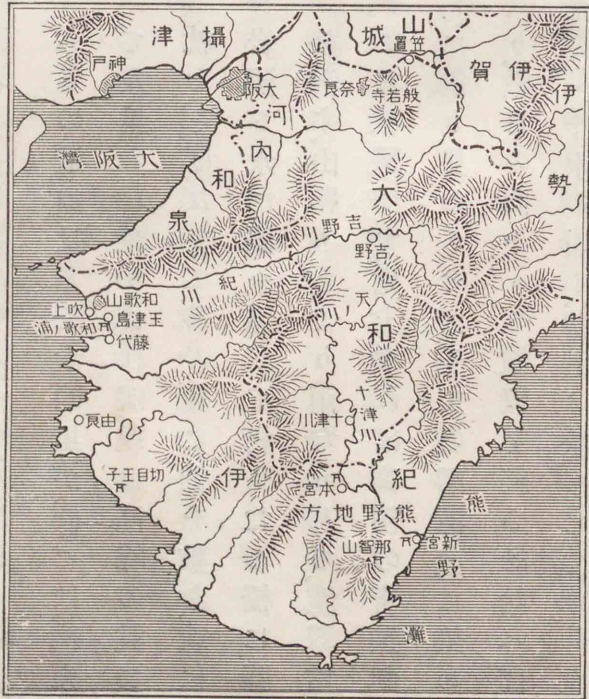
(一)由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の楫緒絶え、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹夕べを送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給

(一)東牟婁郡、三山は本宮、新宮、那智

(二)大和國(奈良縣)吉野郡、熊野川の上流

ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、びんづら結ひたる童子一人來て、熊野三山の間はなほも人の心不和にして、大義成りがたし。これより十津川の方へ御わたり候ひて、時の到らんを御待ち候へかし、兩所權現より案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候。と申すと御覽せられて、御夢



は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、たのもしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。

高峰の雲に枕をそばだつ

岩漏る水に渴を忍ぶ



切目神社

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕をそばだてて、苔の蓆に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を潤ほす。見上ぐれば萬仞の青壁劔に削り、見おろせば千丈の碧潭蓋に染めり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身もくたびれはてて、流るゝ汗水の如く、御足は缺損じて、草鞋血に染まれり。御供の人々もその身鐵石にあらざれば皆饑ゑ疲れて

はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を引いて、路のほど十三日に、十津川にぞ着かせ給ひける。 太平記

九 ロンドン塔

夏 目 漱 石

ロンドン塔の歴史は英國の歴史を煎じつめたものである。過去といふ怪しい物を蔽うた帳がおのづと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものはロンドン塔である。すべてを葬る、時の流が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來つたとも見るべきはロンドン塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬車、汽車の中に取残されたのはロンドン塔である。

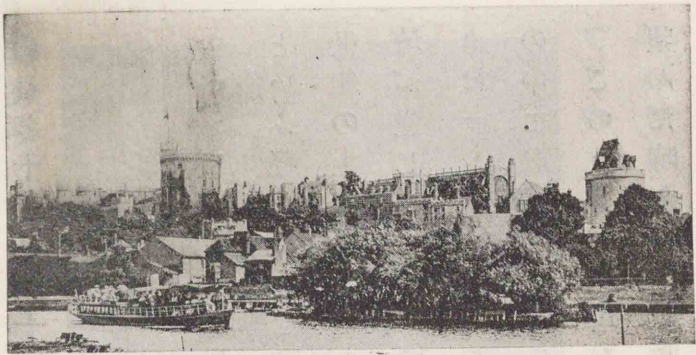
このロンドン塔を、塔橋の上から、テムズ河を隔てて眼の前に望んだ時、余は今の人か、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初とはいひながら、物靜かな日である。空は

龕中の幽光

「時」の流

Thames

灰汁桶を搔雜ぜたやうな色をして、低く塔の上に垂懸つてゐる。壁



塔橋とロンドン塔

土を溶かしこんだやうに見えるテムスの流は、波も立てず音もせず、無理やりに動いてゐるかと思はれる。帆掛舟が一隻、塔の下を行く。風のない河をあやつるのだから、不規則な三角形の白い翼が、いつまでも同じ所に停つてゐるやうである。傳馬の大きいのが二艘上つてくる。たゞ一人の船頭が艦に立つて、櫓を漕ぐ。これも殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには、白い影がちらちらする。大方鷗であらう。見わたした所、すべてのものが静かである。もの憂げに見える。眠つてゐる。皆過去の感じである。さうしてその中に冷然と二十世

(一) 東京市麹町區。

紀を輕蔑するやうに立つてゐるのが、ロンドン塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史のある限りは、我のみはかくてあるべしといはぬばかりに立つてゐる。その偉大なものには、今更のやうに驚かれた。この建築を俗に「塔」と稱へてゐるが、塔といふのは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つた大きな地域である。並び聳えてゐる櫓には、圓いもの、角張つたもの、いろいろ異なる形状はあるが、いづれも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へようと誓つてゐる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べて、さうしてそれを蟲眼鏡でのぞいたら、或はこの「塔」に似たものができ上りはすまいかと考へた。手余はまだ眺めてゐる。セピア色の水分を以て飽和した空氣の中に、ぼんやり立つて眺めてゐる。二十世紀のロンドンが、我が心の裏から次第に消え去ると同時に、眼前の塔影が、幻の如き過去の歴史

一目散

(一)イタリーの詩人ダンテ作「神曲」地獄篇中の句
呵責

を我が腦裏に描き出してくる。朝起きてすゝる澁茶に立つ烟の、寢足らぬ夢の尾を曳くやうに感じられる。暫くすると、向岸から長い手を出して余を引張るか、と怪しまれて來た。今まで佇立して身動もしなかつた余は、急に川を渡つて、塔へ行きたくなつた。長い手はなほなほ強く余を引く。余は忽ち歩を移して、塔橋を渡りかけた。長い手はぐいぐい引く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで馳着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮游するこの小鐵屑を吸収してしまつた。門を入つて振返つた時、
憂の國へ行かんとするものはこの門を潜れ。
永劫の呵責に遭はんとするものはこの門を潜れ。
迷惑の人と伍せんとするものはこの門を潜れ。
正義は高き主を動かさず、神威は、最上智は、最初愛は我を作る。
我が前に物なし、たゞ無窮あり。我は無窮に忍ぶものなり。

常態を失ふ

(一)Tank

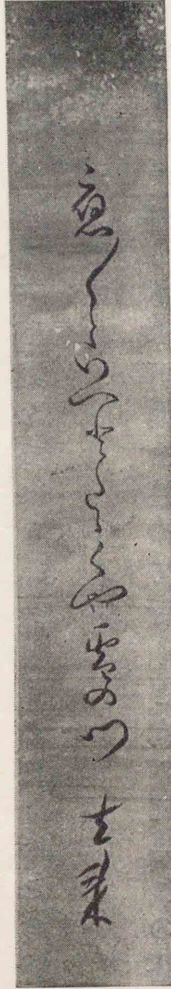
無二に鳴らし
無三に鳴らす

この門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。
といふ句がどこぞに刻んではないかと思つた。余はこの時すでに常態を失つてゐる。
空壕にかけてある石橋を渡つて行くと、向ふに一つの塔がある。これは圓形の石造で、石油タンク状をなして、恰も巨人の門柱の如く、左右に屹立してゐる。その中間を連ねてゐる建物の下を潜つて、向ふへ抜ける。中塔とはこのことである。少し行くと、左手に鐘塔が峙つてゐる。眞鐵の楯、黒鐵の甲が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて、敵遠くより寄すると知れば、塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て逃れ出る囚人の、逆しまに落す松明の影から闇に消える時も、塔上の鐘を鳴らす。心傲つた市民が、君の政非なりとて、蟻の如く塔下に押寄せてひしめき騒ぐ時も、また塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。或時は無二に鳴らし、或時は

無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたやら。余が頭を擧げて、鳶に古りた櫓を見上げた時は、寂然としてすでに百年の響を収めてゐる。——淡虚集——

一〇 枯野

金屏の松の古びや冬ごもり。芭蕉
あれ聞けと時雨ふる夜の鐘の聲。其角
蒲團着て寝たるすがたや東山。嵐雪



蕭條として石に日の入る枯野かな。 蕪村

去來筆蹟

應々といへ
とたくや
雪の門
去來

(一)加賀國(石川縣)金澤の俳人。京都で醫した。芭蕉の門人。

(二)元祿七年(一七〇二)三十四年(一七〇九)芭蕉の歸途伊賀へ花屋仁右衛門に罹つた。

(三)芭蕉
鬼に上る

一一 芭蕉翁の臨終

ながながと川一筋や雪の原。 凡兆
大根引大根で道ををしへけり。 一茶

(一) 十月九日。諸子の取りはからひにて、ふるき衣裳または夜具などの垢つきたる、不淨なるをよき衣に召更へさせまゐらす。師いはく、「われ邊地波濤のほとりに、草を敷き石を枕として終るべき身のかゝる美しき褥の上に、しかも未來までの友ども賑々しく鬼録に上らんこと、受生の本望なり。昨夜目のあはざるまゝ、ふと案じ入りて、吞舟に書かせたる、各詠じ給へ。」

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる
「枯野をめぐる夢心。」ともしはべり、いづれなるべき。これは辭世にあらず、辭世にあらざるにもあらず。病中の心なり。しかし、かゝる生死

河魚の患
風神の名章

諸門葉

の一大事を前に置きながら、いかに生涯好みし一風流とはいへ、こ
れも妄執の一つともいふべけん。去來いふ、さにあらず。日々朝雲暮
雨の間もおかず、山水野鳥の上も捨て給はず。心身風雅ならざるな
く、かゝる河魚の患につかれ給ひながら、今はの限りに、その風神の
名章を唱へ給ふこと、諸門葉のよるこび、他門の聞え、末代の龜鑑な
り。と、涙すゝり涙を流す。眼あるものこれを見れば、魂を飛ばさんのみ。
耳あるものこれを聞かば、毛髮これが爲に動かん。列座の面々感慨
悲想し、慟絶して聲なし。これ師翁一代遺教經なり。この日より殊更
に衰へ給へり。泄瀉度數知れず。(去來記)

芭蕉の弟子
醫師

十日。初時雨せり。師夜の明方より泄瀉度數知れず、一入惱み給
へり。木節この日芍薬湯を盛る。諸子うち寄り食事を進め参らせけ
れど、進み給はず。梨の實を望み給ふ。木節堅く制しけれど、頻りに望
み給ふ故、止むことを得ず進めければ、一片味はひて止み給ふ。木節

(一)廣瀬氏。惟然
坊といふ。

(二)武藏。

いふ、胃受くるところなし、死期近きにあり。と申の下刻に至つて人
心地つき給ふ。けふは一人も食したるものなし。(惟然記)

十一日。朝またまた時雨す。思ひがけなく東武の其角來る。これ
は東武の誰彼同伴にて参宮の序、和州、紀州をうちめぐり、泉州より
浪華に入りしが、圖らずも師の勞りおはすと聞付け、そこここと尋
ね廻り、やうやうに驅付けたるなり。すぐに病床に参りて、皮骨連立
し給ふ體を見参らせ、且つ愁へ、且つ喜ぶ。師も見やり給ひたるまで
にて、たゞたゞ涙ぐみ給ふ。其角も言句なくさし俯きゐたりしを、丈
草、去來、支考その外の衆次の間に招き、御病症の始終を物語る。この
夜、夜すがら伽して、思ひ寄りしことども物語りゐたるに、亥の時頃
より師夢の覺めたる如く、粥を望み給ふ。人々嬉しさ限りなく、次郎
兵衛取計らひて、疾く焚きあげ進め参らす。快く召されけり。朔日よ
り以來の食事なり。土鍋に残りたるを、去來椀に移し入れて押戴き、

(一)水田正秀。
蕉の弟子。芭

病中の餘りすゝりて冬ごもり
去來いふ趣向は他に求めずありあふこと口ずさみて師を慰め
まゐらせん深く案じ入らず頓に句作り給へ」と。惟然は前夜正秀と
二人にて一つの蒲團をひつ張りて被りしに、彼方へ引き、此方へ引
きて終夜寝入らず、はてはしらじらと夜明けけるにぞ、そのことを
互に笑ひあひて、

ひつ張りて蒲團に寒きわらひかな

惟然

一座これを聞きて、いづれもどつと笑ひければ、師も笑ひ給へり。
人々嬉しさ限りなく、十日以來の興にぞありける。初時雨なりけれ
ば、空とく晴れて日影さし入りたるに、蠅多く日南に群りゐたり。人
人臍もてさし取るに、上手下手あるを見給ひて、暫く興に入り給ひ
けれど、大病中のことなれば、忽ち倦き給ひ、ぢきに寢所に入り給ふ。
くじとりて菜飯たかする夜寒かな

木節

うづくまる薬のものと寒さかな

丈草

一々惟然吟聲しければ、師丈草が句を今一度と望み給ひて、丈草
出かされたり。いつ聞きても寂しをり調ひたり。おもしろし。おもし
ろし。と、しはがれし聲もて譽め給ひにけり。いつに變りし機嫌の麗



(筆山華邊渡) 蕉十門哲

しきを喜びけるに、木節一人愁をいただける體に見えければ、其角そ
の故を問ふ。木節いふ、大病中絶食なるに、俄に食の進むことあるは
悪病なり、死期遠きにあらず。と。さは知らず、各さゝめきゐたるに、夜
半頃よりまた寒熱往來ありて、夜あけ頃より顔色土の如くに見え
給ひ、暫く悶亂し、人をも見知り給はざりしが、稍あつてまた正氣に

(一) 櫻並氏、芭蕉の弟子。

(二) 芭蕉の弟子。智月尼の子。

(三) 八十村氏。芭蕉の弟子。

なり給ひ、左右に舍羅、吞舟、うしろよりは次郎兵衛抱き参らせて介抱し、程なく夜明ければ十二日なり。かねては閉籠り給ひしが、隔の障子も襖も取りはなさせ、其角、去來、丈草をこれへと向ふに見給ひ、「穢を憚れば咫尺し給ふな。」とことわり、行水を望み給ふ。木節頻りに制しけれど、頻りに望み給ふ故、止むことを得ず湯をひかせ参らせけり。座を靜かに改め、木節が醫術をつくされしことなど謝し給ひ、さて三人のものを近く召され、乙州、正秀を左右にし、支考、惟然に筆を執らせ、亡きあとの事こまごまと遺言し給ふ。病苦少しも見え給はず。人々奇異の思をなす。伊賀への遺書は手づから認め給ひ、外に京、江戸、美濃、尾張と洩れざるやうに遺言し終り給ふに、始終は門人中にて筆記す。次第に聲細り、痰喘にて惱み給ひければ、次郎兵衛素湯にて口を潤ほし参らす。稍あつて去來に向かひ給ひ、路通が數年の薪水の勞、ゆめゆめ忘れ置かず。我亡きあとはおよそに見捨て

(一) 法華經第二十品觀世音菩薩普門品。

自然禮讚
自然をほめた
たへること

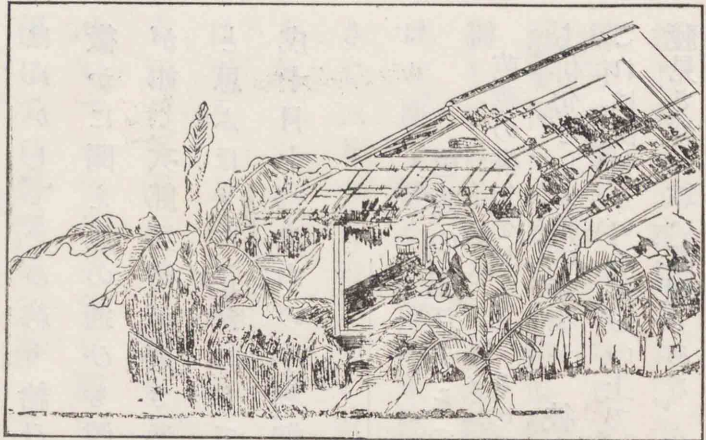
給はず、風流の交し給へ。このこと頼み置きはべり。諸國へも傳へ給はれかし。といひ終り給ひて餘言なく、合掌正しく觀音經と聞えて微かに聞え、息の通ひも遠くなり、申の刻過ぎて埋火の暖のさむるが如く、次郎兵衛が抱き参らせたるによりかゝりて、寝入り給ひぬと思ふほどに、正念にして終に屬續につき給ひけり。時に元祿七甲戌十月十二日申の中刻、御年五十一歳なり。(支考記) — 花屋日記 —

芭蕉の生活とその俳句「自修文」

荻原井泉水

芭蕉の俳句を見ると、その生活がそつくりそのまゝ出てゐるものが多い。即ち俳句といふ彼の藝術が、彼の自然禮讚の生活とびつたり合致して、隙がない。これは俳句といふものの上で、いや日本の詩といふものの上で、芭蕉に依つて発見された尊い眞理である。芭蕉以前の俳句は、一つの作爲若しくは機智であつて、おもしろさうなことを考へ、おもしろさうにいひこなせば、いいとされ

(一)江戸。今の深川區六間堀町。



(芭蕉翁繪詞傳所載)

てゐた。作者自身の生活から句作するなどといふことは、思ひも寄らなかつたのである。さうした際に、俳句は——詩は——作者の實感から出發せねばならぬ、作者の生活から産みだされねばならぬといふことを實證した芭蕉は、えらいといはねばならぬ。芭蕉が深川六間堀の小さな草庵に隱栖して、獨り心の中に新しい詩の芽を育んでゐた頃の作、

芭蕉野分のわきして盃に雨を聞く夜かな
庭には數株の芭蕉が植ゑてあつたので「芭蕉庵」と稱し、「芭蕉」といふ名もこれから得たといふその草庵は、屋根も傷んで野分の雨が洩るので、盃を出して雨うけしてゐるわびし秋風がすさまじい勢を以て軒先に迫つてくる。

一たまりもなく破れてしまふ芭蕉の傷み易い葉の揉まれる音、はらはらと散彈を撃つやうな大粒の雨、その雨がじやじやと盃に落ちる音も聞えるやうだ。部屋の中にじつと耳をすまして大地の音を聽いてゐるやうな作者の寂しい、澄んだ、わびしい心持を中心として、秋の寂しい自然がこの俳句に生きてゐる。

芭蕉庵の近くには彼の門弟の曾良といふものが住んでゐた。朝夕、薪水の勞を扶けてゐた。或日雪の降る中に、いつもの如く曾良は芭蕉を訪ねて來た。懶い芭蕉は爐に火の消えたのもそのまゝにしてゐた。

君火たけよきもの見せん雪まろげ
雪まろげは雪を丸めて何かの形に造つたものである。二人の親しさ（それは子供のやうな純な感情）が、この俳句の言葉にしみ出てゐる。

曾良の外にも、芭蕉の門人たちは、をりをり訪ねて來ては庵を賑はした。しかし、芭蕉は夜も更けて、獨り自分の影法師より外に人の形のない部屋にものを考へてゐる時などは、さすがに寂しかった。

酒のめばいとどねられぬ夜の雪

芭蕉の肉人的な感情がよく出てゐる。芭蕉は酒を嗜む方ではないが、全く飲めないのではなかつた。しかし、酒の句は甚だ少い。「花にうき世わが酒しろし飯くろし。」といふ句は、深川隠栖以前、江戸市中にゐて困苦を嘗めてゐた時代の作である。門人其角が餘り大酒たいしゅをするといふので、その健康を氣づかつた餘り、「飲酒一枚起請」の文を寫し、

朝がほに我は飯食ふ男かな

の句を添へて、其角の許に送つたこともあつた。大酒をする人として、世の中が寂しいから盃を手にするのであらう。しかし、芭蕉は靜かに醒めて、その寂しさをじつと見据ゑてゐる人であつた。世の人々が生きる爲にと競ひ立つて、あわたゞしく馳せくらべするやうに一生を過すのとは違つて、時といふものが人生を浮かべて、悠久から悠久に流れて行く姿をじつと見すゑてゐる人であつた。

暮おそき四谷しよやすぎけり紙草履

さうした靜觀の目は、殊に自然の風物に向けられた。多くの人が無感興に見て過ぎてしまふやうな路傍の雜草でも、それを凝視してゐれば、その中に自然の

(一)江戸。今の四谷區。

大きな生命が全體的に輝いてゐることを彼は知つた。

よく見ればなづな花さく垣根かな

作者のやはらかい感情が、「おゝここに。」と、か弱いなづなを抱きかゝへるやうである。そして可憐ななづなの鄙びた姿が、芭蕉にほゝゑみかけてゐるやうである。これはなづなを歌つた句だが、これがそのまゝ、芭蕉自身の生活を歌つたことになつてゐる。

古池や蛙とびこむ水の音

芭蕉の名を知るものは誰も知つてゐるほど人の口に傳へられてゐる作だが、この句でも、芭蕉の生活を背景にしてその味はひが生きてくる。何となく惱ましさを覚えるやうな一日、草庵のあたりにはもの音といふものが聞えない。すべてのもものが、その古池の水のやうに淀んでたゞへてゐる中に、その靜寂を破つて、作者は確かに一つの音を聞いた。それは蛙が水に飛びこんだといふ些細な地上の一事実だが、この一つの音にも、汎有的な生命のぬきさしのならぬ自然味を感じたのである。地上のすべてのものに悉く神の意志が現れてゐる不思議

汎有的な生命
宇宙の萬物の
もつ生命のい
となみ。

證悟
根據をつかんで
中心にさして
大なるもの
の前に感謝し
額づくやうな
禮讃的

議さを、芭蕉は證悟したのである。作者の心持——或大自然の暗示に觸れたやうな一刹那の緊張した心持、その心持を愛惜して、自然の懐につましく生きてゐようとする作者の禮讃的な生活——が出てゐるといへよう。

名月や門にさしくる潮がしら

この「門」は人の家の門ともれようが、やはり芭蕉庵のさゝやかな門口と見なければ生きて來ない。芭蕉庵は深川のなまぎ小名木川の邊にあつたので、満潮の時は草庵近く水があげて來たのである。「名月や」といふ詠歎的な言葉は、月の高い無邊際むへんざいの天空に目を放ちやつた氣持で、その氣持が、廣々とした潮のゆらめきにとけきつて、またひたひたと自分の胸に歸つてくる感情の波動が、「門にさしくる潮がしら」と結んだ短い言葉のリズムに表現されてゐる。この句に描かれてゐるものは、月夜の佳景ではない。月に清められてゐる作者の清々しい生活そのものである。

上に「芭蕉の生活」といつたが、この言葉は内面的の生活、即ち心の生活といふ意味である。芭蕉は、「佳い生活」、即ち心の平和な、感謝に充ちた生活をし

無邊際
はてしのない。

報謝
恩にむくいる
爲におくるこ

ようと考へた人である。外面的に、物質的に佳い生活をしようと思つたのではない。かやうな物質的生活に對しては、彼は全く意欲を棄ててゐた。自ら金を得ようとせず、たゞ弟子たちの報謝するところに依つて、貧しく生きてゐられれば結構だとした。深川の庵室も一門人から提供してもらつたのであるし、日の米や鹽も門人の喜捨きせつに任してあつたのである。芭蕉はさうしてこそ、人はほんたうに自然の愛を感じ、また人間の愛を感じて生きることができると思つた。生存競争といふいがみあひもなく、常に合掌してゐるやうな有難い心持で生きてゐられると思つた。さうしてこの愛と感謝とに充ちた一念が、ものに觸れて表現される所に、彼の詩、即ち彼の俳句が生まれたのである。

陽炎の我が肩にたつ紙衣かみえかな

自分といふものを自然の光明の中に置いて、その光明をしみじみと暖かく心の中に感受してゐる心持が生きてゐるではないか。かやうな專念的な、中核的な心持を表現するには、極めて單純な、原始的な、簡素な、しかも凝聚的な強い響をもつた言葉でなければならぬ。そこに芭蕉は「俳句」といふ十七字の

中核的
物の心髓に徹
つた。
凝聚的
物のいとこ
ろばかりをせ
んじつめた。

詩形を見出したのである。されば芭蕉は、自分の生活を以て、俳句といふ藝術を活かしたのである。また俳句といふ藝術が、かやうな生活の心境を歌ふ爲に、二つなきものであつたのである。芭蕉の生活とその俳句とは、びつたりと一つに合つてゐて、その間に少しの隙もないのである。 — 古人を説く —

一六 十六夜日記

阿 佛 尼

(一)山城と近江との國境。關址は今の犬谷驛附近といふ。

粟田口といふ所より車はかへしつ。ほどなく逢坂の關越ゆるほどに、

さだめなき命は知らぬ旅なれど

またあふ坂とたのめてぞゆく

野路といふ所は、こしかたゆくさき人も見えず。日は暮れかゝりて、いとも悲しと思ふに、時雨さへうちそゞぐ。うちしぐれふる里おもふ袖ぬれて

(二)近江國(滋賀縣)栗太郡老上村。

ゆくさき遠き野路のしの原

こよひは鏡といふ所に着くべしと定めつれど、暮れはてて行着かず、守山といふ所にとゞまりぬ。ここにも時雨なほ慕ひ來にけり。

(一)近江國(滋賀縣)蒲生郡鏡山村。
(二)同野洲郡守山町。

いとどなほ袖ぬらせとや宿りけん

まなく時雨のもる山にしも

けふは十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。未だ月の光は微かに残りたる曙に、守山を出でて行く。やす川渡るほど、先立ちて行く旅人の、駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。

(三)建治三年十月。

(四)野洲郡。

旅人は皆もろともに朝立ちて

こまうちわたす野洲の川霧

十七日の夜は、小野のしゆくといふ所にとゞまる。月出でて、山の峰に立ちつゞきたる松の木のみ、けぢめ見えていとおもしろし。こは夜深き霧のまよひにたどり出でつ。さめがるといふ水、夏なら

(五)同坂田郡。けぢめ見えておもしろし。
(六)坂田郡。米原の東北一里餘。居寤の清水は古來有名。

ばうち過ぎましやと思ふに、かちびとはなほ立寄りて汲むめり。
 むすぶ手に濁る心をすゝぎなば
 うき世の夢やさめが井の水
 とぞ覺ゆる。

十八日、美濃の國關の藤川渡るほどに、まづ思ひつゞけける、

わが子ども君に仕へん爲ならで

渡らましやは關のふぢ川

不破の關屋の板庇は、今もかはらざりけり。

ひま多き不破の關屋はこのほどの

時雨も月もいかにもるらん

關よりかき暮しつる雨時雨に過ぎてふり暮せば、道もいとあし
 くて、心よりほかに笠縫のうまやといふ所に、暮れはてねどとゞま
 る。

(一)美濃國(岐阜縣)不破郡。古今集に「藤川の國せきし藤川に仕へんよるづ代まで。」

(二)不破郡關原村。松尾の大木戸坂にあつた關所。天武天皇の時始めて關を置かれた。

心よりほかに(三)同安八郡北杭瀬村。



十六夜日記

岩田正己筆

(一)三河國(愛知縣)碧海郡知立町

(二)同寶飯郡

たび人はみのうち拂ふ夕暮の

雨にやどかるかさぬひの里

二十一日、八橋^(一)を出でて行くに、いとよく晴れたり。山遠きはら野を分けゆく。晝つ方になりて、紅葉いと多き山に向かひて行く。風につれなきところどころ、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、あをぢの錦を見る心地す。人に問へば、宮路山^(二)といふ。

しぐれけり染むるちしほのはてはまた

もみぢの錦いろかへるまで

この山まではむかし見し心地するに、頃さへ變らねば、

待ちけりな昔も越えし宮路山

おなじ時雨のめぐりあふ世を

山の裾野に竹のある所に、茅屋のひとつ見ゆる、いかにして、何のたよりにかくて住むらんと見ゆ。

ものあやめ
もわかぬほど
(一)寶飯郡

(二)二條天皇の平治元年十二月
(三)顯頼の子。承安三年(一八三三年)歿、年五十。
(四)藤原信賴。忠隆の子。清盛に六條河原で殺された。年二十七。
(五)不詳。
過分
自然のこと

ぬしやたれ山の裾野に宿しめて
あたり寂しき竹のひとむら
日は入りはてて、なほものあやめもわかぬほどに、わたうどと
かやいふ所にとままりぬ。

一三 光頼卿の參内

さるほどに、内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、このほどは信頼卿のふるまひ過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らんとて、殊に鮮かに束帯ひき繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の装束に出立たせ、自然のこともあらば人手にかな。汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ。とて、御身近く置き、その外、清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて

ところどころ門々を堅く守護しけるを事ともせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。



紫宸殿の後を経て殿上一座して、その座の上藤たち皆下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議のことかな。人はいかにふるまふとも、彼は右衛門督、我は左衛門督なれば、下には着くまじきものを。と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、けふの御座席こそよしどけなう見え候へ。と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上にも

(一)顯長の子。建久二年(一一八五年)歿、年五十三。
しどけなし

ずと着き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなさましと見給ふに、光頼卿下襲のしり引直し、衣紋繕ひ笏とり直し、氣色して、けふは衛府督が一座すると見えて候。召に参ぜざらんものをば死罪に行はるべしとやらん承りて、参内するところなり。抑、何事の御謔ぞ。と問ひけれども、信頼卿ものも宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議のさたもなし。ほど經て光頼卿つい立ちて、悪しう参つて候ひけり。とて、しづしづと歩み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれこの殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしませざりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あは

れこの人を大將として合戦せば、いかばかりかたのもしからん。と申せば、傍なるもの、昔、頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。といへば、また傍よりなど、その頼信をうち返して信頼と附き給ふ。右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしませず。といへば、壁に耳、天に口といふことあり。恐し、恐し、聞かじ。といひながら、皆忍笑ひに笑ひけり。

光頼卿かやうにふるまひ給へども、急ぎても出でられず。殿上の小じとみの前、見参の板高らかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當(一)惟方のおはしけるを招き寄せて宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、参じたれども、承り定めたることもなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職然るべき人どもなり。そ

(一)左兵衛督檢非
違使別當藤原
惟方

(一)少納言藤原通憲
入道信西
平治元年(一一八一)歿

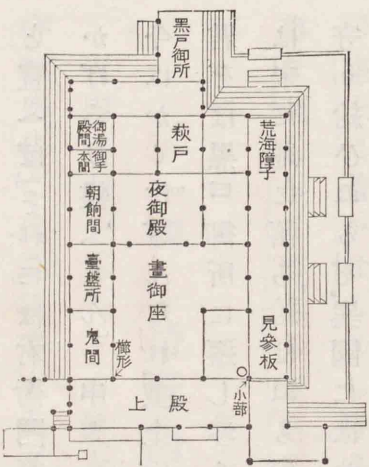
(二)藤原高藤 昌泰三年(一一六〇)歿
六十三
(三)高藤の子定方 承平二年(一一五九)歿
年六十

さしもどかる

のうちに入らんこと甚だ面目なるべし。さて先日、右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向けられけることはいかに。以ての外然るべからざるふるまひかな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに耻辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず。と宣へば、別當それは天氣にて候ひしかば。とて赤面せられけり。

光頼卿重ねて、こはいかに勅諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代、承り行ふことは皆これ徳政なり、一度も悪事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なうて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかる、ほどのことはなかりしに、

御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉、紀伊國、伊賀、伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなる。



信頼卿が語らふところの兵をこば清くならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をやめぐらすべき。若しまた火などをかけなば、君もいかで殿か安穩にわたらせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎

なるべし。いかに況んや君臣共に自然のこともあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべきをや。右衛門督は御邊に大小事を申し合はすとこそ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上はいづくにおはします

(一)後白河上皇

ぞ。「黒戸御所に。」上皇は、「一本御書所に。」内侍所は、「温明殿に。」劔璽は何處に。「夜の大殿に。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

かけろふ

宿業

のろのろしげ

また朝餉の方に人音のし櫛形の穴に人影のしつるは何ものぞ。と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房などぞかけろひ候ふらんと申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今ばかりござんなれ。主上のわたらせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷し參らせたなり。未代なれども、さすがに日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をいかが守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝には未だ此の如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かな。とて、のろのろしげに憚るところなく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、我いかなる宿業に

よつてかゝる世に生まれ合ひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも口をも洗ひぬべくこそはべれ。とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼卿の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみては、うち萎れてぞ出で給ひける。

—平治物語—

一四 待賢門の戦

その一

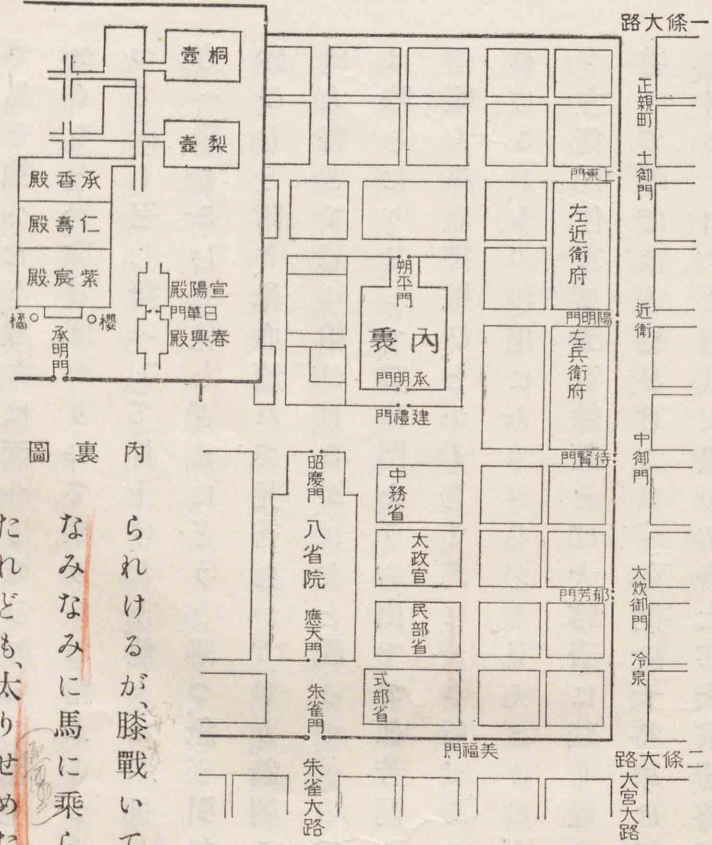
大内へ向かふ人々には、大將軍は左衛門佐重盛、^(一)三河守頼盛、^(二)淡路守教盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、新藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀬尾太郎兼康、伊藤武者景綱、館太郎貞康、同じき十郎貞康を始めとして、都合その勢三千餘騎、六波羅をうち出でて、賀茂河を馳渡し、西の河原に控へたり。

(一)平清盛の長子。
(二)平忠盛の第五子。清盛の弟。
(三)清盛の弟。

花洛

左衛門佐重盛は生年二十三、けふの軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫛の句の鑽、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小鳥といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、黄桃花毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて、乗り給へり。重盛のたまひけるは、年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰かここに樊噲、張良が勇をなさざらん。とて、三千餘騎を三手に分つて、近衛、中御門、大炊御門、大宮表へうち出でて、陽明、待賢、郁芳門へ押寄せたり。

大内には南、西北の三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承明、建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺、桐壺、紫宸殿の前後まで兵ひしとなみゐたり。これ皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流れうち立つたり。大宮表には平家の赤旗三十餘流れ差揚げて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつと作りけ



は着たり、馬は大きなり、乗煩ふ上、主の心には似も似ず、逸りきつた

れば、大内も響き渡りて夥し。鬨の聲に驚きて、たゞ今までゆゝしく見えられつる信頼卿、顔色變りて草葉の如くにて南階を下

(一) 周の穆王が八匹の駿馬を驅つて天下を周遊した故事。

る逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乗りかね給ふところを、侍二人つと寄つて、疾く召し給へ。とて押上げたり。餘りにや押したりけん、弓手の方へ乗りこして、伏しざまにどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顔に砂ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大将として恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信賴といふ不覺人は臆したりな。とて、日華門をうち出でて郁芳門へ向かはれければ、信賴も鼻血押拭ひ、とかくして馬にかき乗せられ、待賢門へ向かはれけるが、ものの用にあふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは、この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衛門佐重

苗裔 僻目

見よ

(二) 源義平、義朝の長子。

盛、生年二十三。と名のり懸けければ、信賴返事にも及ばず、それ防げ、侍ども。とて引退く。大将の引き給ふ間防ぐ侍一人もなし、我先にと逃げければ、重盛愈、勇みて、大庭の棟の木の下まで攻めついたり。義朝これを見て、惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が、待賢門をはや破られつるぞや。かの敵追出せ。と宣ひければ、承り候。とて驅けられたり。續く兵には鎌田兵衛、後藤兵衛、佐々木源三、波多次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、長井齋藤別當、岡部六彌太、猪俣小平六、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎大夫以上十七騎、轡を並べて馳向かふ。大音聲を揚げて、この手の大将は誰人ぞ。名のれ聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子鎌倉惡源太義平と申すものなり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしより、この方、たびたびの合戦に一度も不覺の名をとらず。年積つて十九歳、見參せん。とて、五

(三) 武藏國(埼玉縣)比企郡菅谷村。

端武者

百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、豎ざま横ざま十文字に敵をさつと蹴散らして、端武者どもには目な懸ける。大將軍を組んで撃て、櫓の匂の鎧に蝶の裾金物打つて黄桃花毛の馬に乗つたるこそ重盛よ、押並べて組んで落ち、手捕にせよ。下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衛門、新藤左衛門を始めとして、百騎許が中にぞ隔りける。悪源太を始めとして十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まん組まんとぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘騎かなはじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

一五 待賢門の戦 その二

大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふところに、筑後

(一)平貞盛

守つと参りて、曩祖平將軍の二たび生まれ替り給へる君かな。と向かふさまに譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、また大庭の椋の木まで攻寄せたり。また悪源太驅向かひ、見まはしていひけるは、たゞ今向かひたるは皆新手の兵なり。但し大將は、もとの大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ。押並べて組んで捕れ、兵ども。と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波次郎、同じき三郎、瀬尾太郎、伊藤武者を始めとして、百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、悪源太弓をば小脇にかい挟み、鎧踏張り突立ち上り、左右の手を擧げ、幸に義平原氏の嫡々なり。御邊も平氏の嫡々なり。敵には誰か嫌はん。寄れや、組まん。といふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下に追廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、また大宮表へ引

いて出づ。悪源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ敵たびたび驅入るらめ。あれ速かに追出せ。といひ遣されければ、俊綱馳せてこの由をいふに、承り候進めや、ものども。とて、色もかはらぬ十七騎、大宮表に驅出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、我が子ながらも義平はよく驅けたるかな。あ、驅けたり。とぞ譽められける。

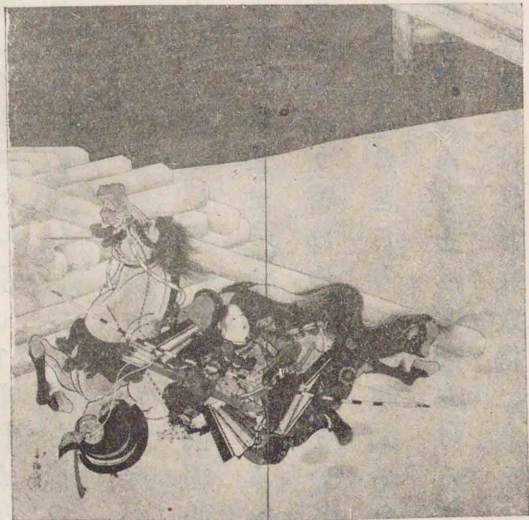
大將重盛、與三左衛門景安、新



一のそ (筆雅永川山) 盛重と平義

かたなづけ
けし飛ぶ
射向の袖

藤左衛門家泰主従三騎かけ離れ、二條を東へ引かれければ、悪源太、鎌田にきつと目合はせて、「ここに落つるは、大將とこそ見れ返せや。」とて追つかけたり。すでに堀川にて追つめけるが、弓手の方に材木多く充ち満ちたるに、悪源太の乗り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。鎌田兵衛延ばさじと、十三束取つて交ひ、よつ引いてひやうと射る。重盛の射向の袖にはたと中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちやうと中りて、籠かづき碎けて跳り返れり。悪源太、これは聞



二のそ (筆雅永川山) 盛重と平義

ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。馬を射て、落ちんところを撃て。」と下知せられければ、またよつ引いて追ひざまに、筈の隠るゝほど射こみたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳落され、兜も落ちて、大童になり給ふ。鎌田堀川を馳越えて、重盛に組まんと落合ふ。重盛近づけては、かなはじとや思はれけん、弓の弾にて鎌田が兜の鉢をちやうと突く。突かれてゆらふる間に、兜を取つてうち着つゝ、緒を強くこそ締められけれ。

與三左衛門馳寄つて中に隔り、申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、遂に天下を保たせき。主辱しめらるゝ時は臣死す。」といふに非ずや。景安ここに在り、寄れや、組まん。」といふまに、鎌田兵衛と引組んで、取つて押へけるところに、悪源太馬を引起し、これも堀川を馳越えて、重盛に組まんととんで懸りけるが、鎌田をや助くる。大將をや撃たん。」と思案しけれども、大將にはまたも

寄せあふべし。政家を撃たせてはかなはじ。」と思ひ、與三左衛門に落合うて、三刀刺して首を取る。重盛は頼みきつたる景安撃たせて、命生きて何かせん。」とて、すでに悪源太と組まんとせられけるを、新藤左衛門馳來り、家泰が候はざらん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。」とて、我が馬を引向け、中に隔てて悪源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を撃たせてはかなはじと思ひければ、新藤左衛門に落重つて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助り難き命なり。

十二月二十七日の巳の刻ばかりのことなるに、一むら雨さつとして、風は烈しく吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも氷柱いたれば、乗りかねたり。悪源太これを見給ひて、手形をつけて乗れや。」と宣ひければ、打物抜いて、つぶつぶと手形を切つてぞ乗りたりける。鞍に

手形

手形をつくること、この時よりぞ始れる。

—平治物語—

一六 樞園文抄

中島 廣足

一書

夏の日の暮難きをも知らず、冬の夜の長きをも覚えぬは、ふみ見る心の樂しさになんありける。さるは道々しき筋のはさらなり、家にしるせる何くれのふみ、またかりそめの筆すさびなど、唐やまと、いにしへ、今と、いとさまざま多かる中に、わがたてたる筋ならぬも、見もて行くまゝには、えうあることどもありて、かにかくに飽かずおもしろく樂しきは、ふみにしくものまたなかりけり。遠き世のを見るほどは、われもその世にある心地して、やがてその人々を友となしてうち語らふ心地さへせらるゝを、われも筆とりて、よしなし事ども書きつくるが、たまたまも散りばひ残りて後の世に傳は

散りほふ

(一)本居宣長の號。

さは

暮山霞
山のははう
つみはてぬ
かすくはれ
のねくみや
のねくみや
るのねくみや
らむ
廣足

らば、今の昔を見るが如く、後の人はたわれを友とせんと思へば、千歳の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなん覺ゆる。よろづの心やるわざいとさはなれど、たゞひとりゐて飽かず樂しきは、ふみの外にまた何かはあらん、あるが上にもあらまほしきはふみなりけり。」と、鈴屋翁のいはれたるは、げにさることこそ。



蹟筆 足廣島中

二夕

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸るむら鴉も、いつしか聲しづまりて、向かへるふみもやうやう見えなくなり行くに、おもしろきわたりは、今暫しなるものと口惜しく、さうじ引きあくれば、夕月の影かすかにて、霧たちこめたる棺どもの、あはれに見やらるゝに、青鷺と

さうじ

おとなひ

かやいへるが、あやしき聲になきゆくめる。たゞこの上を過ぎぬと
覺ゆるに、幼き兒の遊びゐたる、めのとなどのよぶをもきかぬが、こ
の鳥の聲におびて、家のうちに走り入りぬめり。道行く人のおとな
ひも絶えて、いたう静けきに、ともし火もてきたるこそ嬉しけれ。

三 山家の興

くさはひ

山里のすまひは寂しきやうなれど、さるかたになれぬれば、なか
なかにをかしうなん。さるは花もみぢの色香はさらなり、鳥、蟲の聲
につけても、おのづから心を慰むるくさはひおほく、松のはしら、竹
のあみ戸、小柴がきゆひめぐらしなど、よろづのてうどさへいたう
ことそぎて、庭などもたゞおのづからなるいはほのたゞすまひ、軒
近くしたゝる水をふる木のうつぼめくものうけためたる、飯炊
ぐにも、手洗ふにも、たゞこの水にてこと足りぬ。まれまれ問ひくる
人、はたあるじまうけなどいふこともせず、蕨、つくしたかうな、とこ

あるじまうけ
たかうな

かむ

ろなどの、をりにしたがひ所につけたるものして、手づからかめる
白酒すゝめなどす。おなじき物語も人聞きはゝかるべきことしな
ければ、心にのこす隈もなく、ゑひすゝみぬれば、やがてうち連れ
つゝ、たゞさながらなるうちとけ姿にて、そこはかとなくあくがれ
ありきなどするも、住まであはれば、とかいひけんやうに、またなく
心ゆきて、いのちも延ぶるやうになん。

(一)「山深くさこ
そ心はかよふ
とも、住まで
あはればしら
んものかは。」
(新古今集、西
行法師)

(二)古今集にある。

一七 歳 暮

鳥野 幸次

きのふといひけふと暮して飛鳥川
ながれてはやき月日なりけり
は春道列樹の歌であるが、實にや初春の初子長閑によみそめた曆
の紙も數減つて、一年三百六十五日は夢の間。かうなつては嬉しい
楽しい追懷よりも、勤むべき道、爲すべき業の怠がひしひしと身を

(一) 荷田春滿の歌。

責めるので、とりわけ學者などにあつては、
見るふみはのこり多くも年くれて
わが世ふけゆく窓のともしび
と悔まれるのが常であり、また老人などは、今更ながら寄る年波に
心細さもうち添ふので、

(二) 古今集、在原元方の歌。

あら玉の年のをはりになる毎に
雪もわが身もふりまさりつゝ
とながめられもする。

とはいへ、餅つき競ふ家の内、松伐りたてる軒のさまなどから、行
交ふ人のしげさやら、飾りたてた市店の花々しさやら、見るもの聞
くもの、何一つ賑はしからぬものもなく、忙しげならぬものもない
世のならはしに伴なうては、たゞうかうかと、年の瀬を越え行く人
が多からう。だが、それも實はものに不足のないあたりのこと、

(一) 萬載狂歌集所載よみ人しらすの歌。

貧乏のぼうが次第に長くなり

ふりまはされぬ年の暮かな

といつた如き境涯や、やりくり算段も盡きはてて、

(二) 芭蕉の句。

分別の底たゞきけり年の暮

と、途方にくれる身に取つては、ここ數日が泣いても喚いても追つ
つかぬ大修羅場、人さまざまな悲劇喜劇に、天道を恨むものさへ少
くはないであらう。

修羅場

歳暮に、東都では古くから「歳の市」といつて、廣い街路に露店を出

(三) 魯江の句。

海山のもの一聲に年の市

といひ、

(四) 曾良の句。

こねかへす道も師走の市のやう

と賑はしたのは、今もかはらぬ有様で、燈火の光天を焦し、賣聲の頗

(一)堀河院初度百首、國信の歌。

る勇ましい中を、マントやコートに身をぬくめた紳士淑女などの買物に徘徊するのは、誠にふさはしくも、また嬉しい光景である。暮も愈、最終の一日となつては、誰しも

何事を爲すともなしに明けて

ことしもけふになりになるかな

の感懐を深うするのだけれども、今更如何ともすることができぬ。たゞ人はこの歳暮の述懐と、年始に起す覺悟とを忘れぬやうにするのが、何より肝腎だと思ふ。

さてこの日は、貴賤いづれも神棚や佛壇を清め、家内を掃除し、蒸物煮物で勝手は大混雑、

今知れて摺小木せはし大晦日

は任柳の句であるが、この瀬戸際に、氣紛れな摺小木もあつたもの。けふを大歳といふのは、五雜俎や代醉編に元日を小歳といふに

(二)書名。十六卷。明の謝肇淛が撰したもの。
(三)瑯邪代醉編。明人張鼎思の著。全四十卷。

(一)俳諧歳時記。萩草。五卷。藍亭青藍の著。嘉永四年出版。

對する名かと歳時記萩草に見え、俗には大晦日とも大三十日ともいふ。この夜を除夜または除夕といふが、除は新を以て舊に易へる義である。兼好法師の徒然草に、

つごもりの夜いたう暗きに、松ども點して、夜半過ぐるまで人の門たゞき走り歩いて、何事にかあらんことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よりはさすがに音なくなりぬること、年の名残も心細けれ。

とあるのは、室町時代のさまであり、去來の

年の夜や人に手足の十ばかり

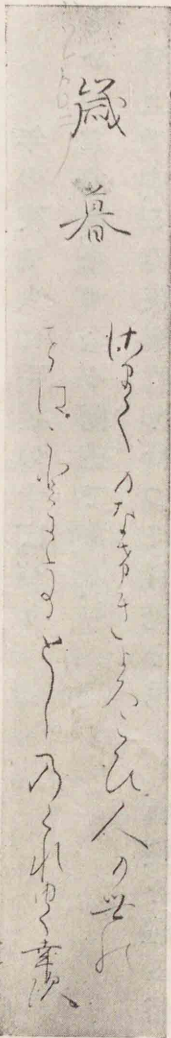
といつたのは、今も全く同感である。

漢土では、この夜爆竹を行つて百鬼を驚かし、癘疫を驅る俗があり、我が國では、十二時を合圖に、撞出す寺々の百八の鐘の音、霜夜を流れて哀に寂しく、煩惱消滅の響を刻むほどもなく、鶏も屢、歌へば、

爆竹
癘疫

寝つくともなき曉起に、まづ若水の釣瓶をはねて、心の底まで清々
しう洗ひ清めて、めでたく元正の天に對ふのを常とする。

歳暮
さまくよる
なけきの
この人の
のことは
のくに
のくれ
のく
幸次



鳥野幸次筆蹟

冬の風物〔自修文〕

佐々木信綱

冬は草木も枯れ、天地の眺もすさむ時であるから、歌に詠むやうな風物も、
春や秋のやうに多くはない。しかし、歌は單に美しいものや、花やかなもの
みを詠むものではなく、普通の目には氣が付かないやうなところに哀を求め、
美を探るのが、歌を詠む人の本分である。この立場で見ると、冬の自然はその
荒涼たるところにまたその美しさがある。殊に冬の風物の中にも、他の時節に
は見られない美しい趣のあるものがある。即ち時雨とか 霜とか、雪とかいふ

ものは、いづれも冬の寒い時候の産物で、春や秋の花や紅葉にも劣らぬ趣をを
りをり見せるものである。時雨といふものは、冬の初にをりをり降つてくる雨
で、日が照つてゐるのに、急に薄く曇つて來て降つてくる趣は、夕立に似て夕
立のやうな激しさがなく、何となく優しい美しい趣のあるものである。この時
雨の眞の趣は、武藏野に建てられた都會よりも、三方に山をめぐらしてゐる京
都にある。随つて眞の時雨の美しさを詠んだ歌は、江戸の歌人のよりは、京都
の歌人の作に多い。東山の麓なる岡崎に住んでゐた香川景樹には、

うき雲のあは田の奥やしぐるらん

音羽のやまぞ見えたりゆく

といふのがある。音羽の山は有名な清水觀音のある後の山、栗田山はその北に
連なつてゐる山である。浮雲のは、淡くといふ意味から栗田にかけて、枕詞の
やうに用ひたのである。こちらから見てゐると、目の前の音羽の山が曇つて、
見る見る隠れて行く。思ふに栗田山の奥は時雨れてゐるのであらうといふ意で
ある。同じく京都に住んだ公卿の歌人千種有功の作に、

北山の炭もてはこぶ都路に

しぐれの雲もおくれざりけり

北山から炭を運んでくる京都への街道に、その炭の荷にもなつて、時雨がふりそゞいでくることよといふので、北山から京都へと炭を送つてくる道に、時雨のさとふりそゞ趣ある景色が、繪のやうに詠まれてゐる。

景樹の弟子なる木下幸文の作に、

とま舟の上には月のさしながら

時雨ふるなりひらかたのさと

といふのがある。枚方(ひらかた)は淀川の岸で、京都から大阪への夜舟(よなふね)の舟着(ふなつき)である。歌の意味は明瞭で、そこに泊つてゐる苦舟(くるふね)の上に、月の光がさしながら時雨がうちそゞといふ、ありのまゝの景色を歌つたのである。夜でも晝でも空の光はそのまゝで、どこかひと所薄曇して、はらはらと降りそゞといふのが、時雨獨得の趣である。

次に霜もまた荒涼たるうちに一種の趣あるもの。木の葉に白くおいたのも、

とま舟 ともをかけた舟の屋根をおぼむしうふとぼともいふ
(一)大阪府(河内)徳川時代ここに監船所を置いて、伏見大坂間の航漕を掌らしめた。

路の上を彩つたのも、とりどりにおもしろい。

とけ霜のいまだかわかぬ草の上に

けふものどけき朝日かげかな

これは熊谷直好の作。霜どけがして、まだ乾ききらない草の上に、けふもまた長閑な朝日の光が照添ふことよといふのである。日かげの麗かな小春日和の美しさは格別なものである。この歌はその趣を詠んだので、けふもといふところに、連日の小春日和といふころが現れてゐる。

山がつかが煙ふきけんあとならし

つばきのまき葉霜にこほれり

これは和歌山に住んだ加納諸平(かのむねひら)が、藩侯の命で紀伊國續風土記を撰すべく、實地踏査に熊野の奥へものしたをりの作。椿の葉をまいて煙草をのむといふ山間の古俗を詠んだのが、かはつてゐる。

朝日かけまだよくさゝで大船の

かげの小舟にのこるはつ霜

(一)景樹の高弟。周防國(山口縣)若國の人。大坂に住んだ。文久二年(一八六二)年(三)五二二年(一)五八十一。歿。

(二)醫者兼學者。また歌をよくした。徳川家の臣。安政四年(一八五三)年(二)五十七。歿。

(一) 歌人。筑前國
福岡縣(福岡縣)
慶應四年(一八四
五年)二月二十八
日歿。年七十八

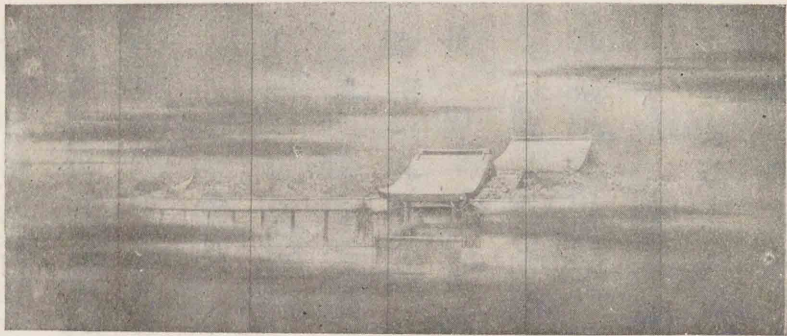
これは大隈言道の作。言道は福岡から大阪へ上るとて瀬戸内海を往復し、その時の作が少くない。これもその一つである。朝日の光がまだよくさ、ないの
で、大船の陰になつてゐる小舟の上に、初霜が消えかねて残つてゐるといふの
で、大船の陰の小舟といふ着眼に、言道らしいおもしろさがある。
終りに雪に至つては、まことに冬の花ともいふべきもので、野山にも、町中
にも、また河邊にも眞白に降積んだ景色は、いふばかりなく清く美しい。随つ
て雪の歌は古來極めて多い。殆ど冬の歌の大半は雪の歌であるといつてよい
らぬのである。ここには特に萬葉集のうちから數首を選んで述べよう。

ふる雪の白かみまでに大君に

仕へまつれば尊くもあるか

これは天平十八年の正月、左大臣橘諸兄以下諸公卿が、太上天皇なる元明天
皇の御所にまゐつて、雪見の御宴に侍した時、勅命によつて詠んだ歌の一つで、
諸兄の作である。歌の意は、降る雪の如く眞白な白髪となるまで、天皇陛下に
仕へ奉つて、かくおもしろい雪の日の宴にも列なり奉ることを思ふと、御いつ

太上天皇
位をゆづられ
た後の天皇の
尊稱。太上天
皇とも略して
上皇ともいふ。



(筆華玉田前) 雪の所御都京

くしみの有難さが、尊くも思はれることかなといふ
意。たふとくもあるかの「か」は「哉」と同じ意。
時に應じて老臣の誠忠の心を述べ奉つた作である。

山のかひそことも見えずをと、ひも

きのふもけふも雪の降れば

同じ時紀男梶の詠んだもの。山の峽は山と山との
間の意。一昨日も昨日も今日も連日雪の降つた爲に、
山の狭間もそことわからないまで、雪が降りうづん
だことよの意。雪の日の眺望をそのまゝに詠んだ作。

大宮の内にも外にもひかるまで

ふれる白雪みれどあかぬかも

同じ時大伴家持の詠んだもの。御所の内外一面に
光りわたるまで降つた白雪の美しさは、見ても見て
も見飽きのしない美しさかなの意。尊い大内山の内

外をこめて、眞白な雪が降りうづんだ景色が、いかにも清浄な感を與へる。ひかるまでの一句も、極めてよくきいてゐる。

一八 今様三題

萬劫年ふる

萬劫年ふるかめやまの

苔むす岩屋に松生ひて、

松の木かげ

松の木かげに立ちよれば

梅が枝かざしにさしつれば

蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる

松の枝には鶴巢くひ

したは泉の深ければ、
梢に鶴こそ遊ぶなれ。

千歳の緑ぞ身にはしむ。

春の雪こそふりかゝれ。

萬歳千秋かさなれり。

巖のそばには龜遊ぶ。

一九 安宅 その一

ワキ詞かやうに候ふものは、加賀の國富樫(一)の何某にて候。さても頼朝、義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作山伏となつて、奥へ御下向の由頼朝聞し召し及ばれ、國々に新關を立てて、山伏を固く選ひ申せとの御事にて候。さる間、この所をば某承つて、山伏をとゞめ申候。今日こんにちも固く申しつけばやと存候。いかに誰かある。狂言詞、御前に候。ワキ詞、けふも山伏の御通りあらば、此方へ申候へ。狂言詞、畏まつて候。

シテ山伏次第「旅の衣は篠懸の露けき袖やしをるらん。サシ、鴻門楯破れ、都の外の旅衣、日も遙々の越路の末、思ひやるこそ遙かなれ。シテ「さて御供の人々には、山伏(二)伊勢の三郎、駿河の二郎、片岡(三)増尾(四)常陸房(五)シテ「辨慶は先達の姿となりて、山伏、主従以上十二人、未だ習はぬ旅

シテ判官 義經
ツレ 同行 山伏
ワキ 狂言 富強 力
ワキ 狂言 富強 力
の 從者 富樫
縣 加賀國 石川
地名 石川郡の

(二) 義盛。
(三) 清重。
(四) 八郎弘常。
(五) 十郎兼房。
(六) 海尊。

- (一) 文治三年。
- (二) 山かくす春の霞ぞ恨めしき、いづれ都の境なるらむと。古今集。
- (三) 近江國(滋賀縣) 高島郡。
- (四) 矢田の野に淺茅色づく有乳山、峰の淡雪寒くぞあるらし。新古今集、人丸。
- (五) 敦賀灣のこと。
- (六) 越前國(福井縣) 敦賀郡。
- (七) 近江と越前との國境。
- (八) 越前國(福井縣) 足羽郡。
- (九) 同國坂井郡。
- (一〇) 加賀國(石川縣) 江沼郡。
- (一一) 同國能美郡小松町附近。

姿袖の篠懸露霜を、けふ分けそめていつまでの、限りもいさや白雪の、越路の春に、急ぐなり。歌、時しも頃は二月の十日の夜、月の都を立出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山隱す霞ぞ春は恨めしき。歌、浪路遙かに行く舟の、海津の浦に着きにけり。東雲早く明けゆけば、淺茅色づく有乳山、歌、氣比の海宮居久しき神垣や、松の木芽山、なほ行く前に見えたるは、杣山人の板取、河瀬の水の淺洲津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に着きにけり。

シテ詞、御急ぎ候ふほどに、これは早安宅の湊に御着きにて候。暫くこの所に御休みあらうずるにて候。判官詞、いかに辨慶。シテ、御前に候。判官、たゞ今旅人の申して通りつることを聞いてあるか。シテ、いや何とも承らず候。判官、安宅の湊に新關を立てて、山伏を固く選ぶところ申しつれ。シテ、言語道斷の御事にて候ふものかな。さては御

下向を存じて立てたる關と存候。これはゆゑしき御大事にて候。まづこの傍にて暫く御談合あらうずるにて候。これは一大事の御事にて候。間、皆々心中の通りを御意見御申しあらうずるにて候。ッレ、我等が心中には、何程のことの候ふべき、たゞ討破つて御通りあれかしと存候。シテ、暫く仰の如く、この關一所討破つて御通りあらうずるは、易き事にて候へども、御出で候はんずる行末が御大事にて候。たゞ何ともして無異の儀が然るべからうずると存候。判官、ともかくも辨慶計らひ候へ。シテ、畏まつて候。某きつと案じ出したることの候。我等を始めて、皆々につくい山伏にて候ふが、何と申しても御姿隠れござなく候。間、このまゝにては如何と存候。恐多き申事にて候へども、御篠懸を除けられ、あの強力が負ひたる笈を、と御肩に置かれ、御笠を深々と召され、いかにもくたびれたる御體にて、我等より後に引下つて御通り候はば、なかなか人は思ひも寄り

申すまじきと存候。判官げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取候へ。シテ畏まつて候。いかに強力。狂言御前に候。シテ笈を持ちて來り候へ。狂言汝が笈を御肩に置かるゝことは、なんぼう冥加もなきことにてはなきか。まづ汝は先へ行き、關の様體を見て、誠に山伏を選ぶか、またさやうにもなきか、懇に見て來り候へ。

狂言しかじか。シテさらば御立ちあらうずるにて候。げにや紅は園生に植ゑても隠なし。山伏強力にはよも目をかけじと、御篠懸を脱替へて、麻の衣を御身に纏ひ、シテあの強力が負ひたる笈を、判官義經とつて肩に懸け、山伏笈の上には雨皮形箱取附けて、判官綾菅笠にて顔を隠し、山伏金剛杖に縋り、判官足痛げなる強力にて、地よるよるとして歩み給ふ御有様ぞ傷はしき。シテ我等より後に引下つて御出であらうずるにて候。さらば皆々御通り候へ。山伏承り候。

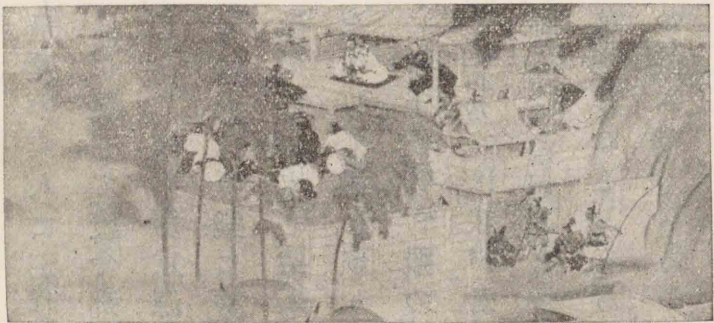
〔富樫の從者。〕

りあると申すか。心得てある。なうなう客僧たち、これは關にて候。シテ承り候。これは南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣され候。北陸道をばこの客僧承つて罷り通り候。まづ勸に御入り候へ。ワキ近頃殊勝に候。勸には參らうずるにて候。さりながら、これは山伏たちに限つてとめ申す關にて候。シテさてそのいはれは候。ワキさん候。頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ、十二人の作山伏となつて御下向の由、その聞え候間、國々に新關を立てて、山伏を固く選び申せとの御事にて候。さる間この所をば某承つて、山伏をとめ申候。殊にこれは大勢御座候ふ間、一人も通し申すまじく候。シテ委細承り候。それは作山伏をこそとめよと仰せ出され候ひつらめ。よも眞の山伏をとめよとは仰せられ候ふまじ。狂言いや、きのふも山伏を三人まで斬つたる上は。シテさてその斬つたる山伏は判官殿か。ワキあらむづかしや問答は無益一人も

通し申すまじい上は候。シテさては我等をも、これにて誅せられ候はんずるな。ワキ、なかなかのこと。シテ、言語道斷かゝる不祥なる所へ來懸つて候ふものかな。この上は力及ばぬこと。さらば最期の勤を始めて、尋常に誅せられうずるにて候。皆々近うわたり候へ。

二〇 安宅 その二

シテ、いでい最期の勤を始めん。それ山伏といつは、役の優婆塞の行儀を受け、ツレその身は不動明王の尊容をかたどり、シテ兜巾といつは、五智の寶冠なり。山伏、十二因縁の褶をすゑて戴き、シテ、九會曼茶羅の柿の篠懸、山伏、胎藏黒色の脛巾をはき、シテ、さてまた八目の草鞋は、山伏、八葉の蓮華をふまへたり。シテ、出で入る息に阿吽の二字を唱へ、山伏、即身即佛の山伏を、シテ、ここにて討ちとめ給はんこと、山伏、明王の照覽計り難う、シテ、熊野權現の御罰の當らんこ



安宅 (小) 山榮達筆

と、山伏、立所において、シテ、疑あるべからず。地、庵阿毘羅吽欠と、珠數さらさらと押揉めば、ワキ詞、近頃殊勝に候。前に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰せ候ふ間、定めて勸進帳のござなきことは候ふまじ。勸進帳をあそばされ候へ。これにて聽聞申さうずるにて候。シテ、何と、勸進帳を讀めと候ふや。ワキ、なかなかのこと。シテ、心得申して候。シテ、詞もとより勸進帳はあらばこそ、笈の中より往來の卷物一卷取出し、勸進帳と名附けつゝ、高らかにこそ讀上げけれ。それつらつら、地、惟れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人

一期の浮沈

もなし。ここに中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝と名づけ奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみ難く、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く、思を善途に翻して、廬舍那佛を建立す。かほどの靈場の絶えなんことを悲しみて、俊乘房重源、諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、この世にては無比の樂に誇り、當來にては數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首、敬つて白す。』と、天も響けと讀上げたり。ワキ、關の人々肝を消し、地、恐をなして通しけり。ワキ、詞、急いで御通り候へ。シテ、詞、承り候。狂言、いかに申上候。判官殿の御通り候。ワキ、いかにこれなる強力とまれとこそ。山伏、すは我が君を怪しむるは、一期の浮沈極りぬと、皆一同に立歸る。シテ、詞、あゝ暫くあわてて事をし損ずな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。ワキ、あれは此方よりとめて候。シテ、それは何とて御とめ候ふぞ。ワキ、あの強力がちと人に似たると申すものの候ふほどに、さてとめて候ふよ。シテ、何と、人が人に似たるとは、珍しからぬ仰

落居の間

めだれ顔

にて候。さて誰に似て候ぞ。ワキ、判官殿に似たると申すものの候ふほどに、落居の間とめて候。シテ、や、言語道斷。判官殿に似申したる強力めは、一期の思出な。腹立ちや、日高くば能登の國まで指さうずると思ひつるに、僅かの笈負うて後にさがればこそ人も怪しむれ。總じてこのほど、憎し憎しと思ひつるに、いでもの見せてくれんとて、金剛杖をおつ取つて、さんざんに打擲す。通れところや、笈に目をかけ給ふは、盗人さふな。地方々は何故に、かほど賤しき強力に、太刀刀をぬき給ふは、めだれ顔のふるまひは、臆病の至かと、十一人の山伏は、打刀ぬきかけて、勇みかゝれる有様は、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。ワキ、詞、近頃誤りて候。はやや御通り候へ。シテ、詞、さきの關をば早拔群に程隔りて候ふ間、この所に暫く御休あらうずるにて候。皆々近う御参り候へ。いかに申上候。さてもたゞ今は餘りに難儀に候ひしほどに、不思議の働を仕候ふ事、これと申

凡慮

すに、君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にもあたらせ給ふと思へば、愈、あさましようこそ候へ。判官詞、さては悪しくも心得ぬと存ず。いかに辨慶、さてまた今の機轉、更に凡慮よりなす業にあらず。たゞ天の御加護とこそ思へ。關のものども我を怪しめ、生涯限りありつるところに、とかくの是非をばもんだはずして、たゞ眞の下人の如く、さんざんに打つて我を助くる、これ辨慶が謀にあらず、八幡の地御託宣かと思へば、忝くぞ覺ゆる。

地ウリ、それ世は末世に及ぶといへども、日月は未だ地に落ち給はず。たとひいかなる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬことやあるべき。判官サシ、げにや現在の果を見て、過去未來を知るといふこと、地、今に知られて身の上に、憂き年月のきさらぎや、下の十日のけふの難を、遁れつるこそ不思議なれ。判官、たゞさながらに十餘人、地、夢の覺めたる心地して、互に面を合はせつゝ、泣く

聊爾

ばかりなる有様かな。クセ、然るに義經、弓馬の家に生まれ來て、命を頼朝に奉り、屍を西海の浪に沈め、山野海岸に起きふし明かす武士の、鎧の袖枕、片敷く隙も波の上、或時は舟に浮かび、風波に身を任せ、或時は山脊さんせきの、馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しある夕波の、立ちくる音や須磨明石の、とかく三年のほどもなく、敵を亡し靡く世の、その忠勤もいたづらに、成果つるこの身の、そも何といへる因果ぞや。判官、げにや思ふこと、かなはねばこそ憂世なれと、地、知れどもさすがなほ、思ひ返せば梓弓の、すぐなる人は苦しみて、讒臣はいやましに世にありて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、たゞ世には、神も佛もましまさぬかや。恨めしの憂世や。あら怨めしの憂世や。

ワキ詞、いかに誰かある。狂言、御前に候。ワキ、さても山伏たちに聊爾を申して、餘りに面目もなく候ふほどに、追つつき申し、酒を一つ參

らせうずるにてあるぞ。汝は先へ行きとめ申候へ。狂言畏まつて候。いかに申候。さきには聊爾を申して、餘りに面目もなく候ふとて、關守のこれまで酒を持たせて参られて候。シテ詞、言語道斷のこと。やがて御目に懸らうずるにて候。狂言しかじか。

(一)比叡山には東塔、西塔、横川とて塔三つあり、辨慶はそでの西塔に住んで居つた。

シテ、げにげにこれも心得たり。人の情の盃に、浮けて心をとらんとや。これにつきてもなほなほ人に、心なくれる吳織。地、怪しめらるな面々と、辨慶に諫められてこの山陰の一宿に、さらりと圓居して、所も山路の菊の酒を飲まうよ。シテ、おもしろや山水に、盃を浮かべては、流に引かる、曲水の、手まづ遮る袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。もとより辨慶は、三塔の遊僧、舞延年の時の和歌。これなる山水の、落ちて巖に響くこそ、地、鳴るは瀧の水。

シテ、たべ酔ひて候ふほどに、先達御酌に参らうずるにて候。ワキ詞「さらばたべ候ふべし」とてもものことは、先達一さし御舞ひ候へ。シテ

「承り候。地、鳴るは瀧の水。シテ、鳴るは瀧の水。地、日は照るとも、絶えずとうたり。絶えずとうたり。疾く疾く立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々。暇申してさらばよとて、笈をおつ取り肩にうち懸け、虎の尾を履み毒蛇の口を、遁れたる心地して、陸奥國へと下りけり。

二一 小 謠

高 砂

四海浪静かにて、國も治る時つ風、枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、ことも愚かやかゝる代に、すめる民として豊かなる、君の恵ぞ有難き。君の恵ぞ有難き。

熊野

四條五條の橋の上、老若男女、貴賤、都鄙、いろめく花衣、袖をつら

(二)太平之世。五日一風。十日一雨。風不鳴。雨不破。塊。玉充。論。

ねて行末の雲かと思えて八重一重、咲く九重の花盛名にふ春の景色かな。景色かな。

鶴 龜

庭の砂は金銀の玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の扉、碑礫のゆきげた瑪瑙の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山も餘所ならず、君の恵ぞ有難き。君の恵ぞ有難き。

二人静

木の芽春雨ふるとても、なほ消え難きこの野邊の、雪の下なる若菜をば、今幾日ありて摘ままし。春立つといふばかりにや、み吉野の、山も霞みて白雪の、消えし跡こそ道となれ。消えし跡こそ道となれ。

鞍馬天狗

花さかば、告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、くらまの

(一)「春日野の飛火の野守いでて見よ、今幾日ありて若菜つみてん。」(古今集、よみ人しらす)
(二)「春たつといふばかりにや、み吉野の、山も霞みてけさは見ゆらん。」(古今集、壬生忠岑)
(三)「花さかば告げんといひし山人の、くる音すなり馬にくらわけ。」(源頼政)

山のうす櫻、手折りしをりをしるべにて、興も迷はじ咲きつゞく、木蔭に並みゐて、いざいざ花をながめん。

竹生島

緑樹影しづんで、魚木に上るけしきあり。月海上にうかんで、は、兔も浪を走るか、おもしろの浦の景色や。

鉢 木

松はもとより常磐にて、薪となるもことわりや。切りくべて今ぞ御垣守、衛士の焚く火は、おためなり。よく寄りてあたり給へや。

烏帽子折

かやうに祝ひつゝ、ほどなく烏帽子折立てて、花やかに三いろ組の、よぼし懸緒取出し、氣高く結びすまし、召されて御覽候へとて、おぐしの上、にうち置き、立退きて見れば、あつばれ御器量や。これぞ弓矢の大將と申すとも、不足よもあらじ。

(一)「緑樹影沈魚上、木。清波月落、見舟、浪。」(建長寺僧自休、竹生島詩)
(二)「御垣守衛士の焚く火の夜は燃えて、晝は消えて、思のなご、そ思へし。」(詞花集)

懸緒

二二 人格の表出 倉田百三

我々の感情や意志の表出は、我々の人格がいかなるものであるかを、直接に他人に印象せしめる機会である。我々の内面生活は、自然に肉體的表出を求めようとする衝動をもつものである。しかしながら、我々が他人に對してこの表出を印象しようと欲し、或は自然に印象すべき位置に置かれた時、その表出のし方は、對人關係の道德に依つて制約されなければならない。表出のし方が自由であり、自然であり、その場所と時とにふさはしい、即ち禮に適ふか否かは、我々のカルチュアの程度を示す標幟であるが、自分はここでは、特に我々が卑しむべきものとして考へねばならない、即ち我々が人格の尊威を傷つけるやうな表出のし方のみ選んで擧げる。我々の内面の状態が、即ち表出されるところのものが、卑しむべき

内面生活

Culture

1. 心中生活
 2. 精神生活
 3. 肉體生活
 4. 社会生活
 5. 文化

4. カルチュア
 5. 文化

きものである時、その自然な表出が卑しむべき印象を與へることはいふまでもない。しかし、我々の内面の状態が卑しむべきものでなくても、その表出のし方が人格の尊威を傷つけるやうなものである時には、それはなほ卑しむべきものとなる。例へば、我々が飢を感ずることは自然である。しかし、我々がかの犬の如くにその飢を露骨に表しても、その欲しさうな眼付をして他人の食膳を窺ふならば、それは自己の人格の尊威を保ち得ないものとして、卑しまれねばならない。隣人の愛に飢ゑた時に於ても、その人間らしい孤獨の寂しさや飢渴をも、餘りに哀願的に相手と時と場所とに對する考慮を費す餘裕なく表出することは、人格の尊威を傷つけないではおかない。すべて他人の感情に訴へ過ぎる、女々しく、未練がましく、愚痴っぽい表出は、高貴の徳と一致しないものである。決して自己の内面の現實を他人に隠蔽することがいいといふのではない。自

1. 心中生活
 2. 精神生活
 3. 肉體生活
 4. 社会生活
 5. 文化

己の苦痛や悲哀に堪得ることが、人格の尊威を構成する重要な力だからである。我々が他人に向かつて苦痛や悲哀を訴へることは、却つて彼等の苦痛や悲哀の原因となり、これに對する同情と奉仕との義務を負はせることになる。しかも多くの人々は自己の無力や、運命の**不可抗力**や、己自らの不幸の爲に我々の**愁訴**を容れる餘裕のない場合が少なく、そのため彼等を徒に**窘窮**せしめるに過ぎない結果となる。これ我々が自己の苦痛や悲哀を他人に表出することを、でき得る限り抑制しなければならぬ所以である。故に自己の苦痛や悲哀の表出に關しては、**ストイック**的な寡黙の方が、高貴の徳と一致する。瘠我慢や**負惜み**のやうな不自然さは賞讃すべきものではないが、なほそれは卑しむべき感を與へない。しかし、自己の負ふべきものを負はず、自己の過失や蟲の良さを棚に上げ、**過剰**にして亂れた表情を以て泣き訴へることは、人格の威嚴を傷

1. 厄直 災 災
2. 厄直 災 災
3. 困り 災
4. 抑へ 災
5. 苦痛 災
6. 厄直 災
7. 厄直 災

つける。しかもそれが何等の効果なき愚痴の場合に於てなほ更である。不可抗な運命を勇ましく負うて忍受することは、人格の尊威と力との**靜**的な現れとして、尊い感を與へる。單に苦痛や悲哀の表出ばかりでなく、愛や、好意や、怒や、その他すべての感情の表出が多で輕々しいことは、高貴の徳と一致しない。この點に於ては、自分は西洋風の表出よりも、東洋風の表出を好むものである。殊にかの**能樂**に於ける表出法は、最も洗練され、簡素で、しかも**效果的**である。素より自分は**天真**や、**率直**や、人間らしい隔なき愛するものである。我々が野原を散歩して、そこに出會つた見知らぬ人に直ちに話しかけたにしても、それを必ずしも間違とは思はない。寧ろかゝる態度の何等のわだかまりなく執れるやうになることを、自分の理想の境地とするものである。しかし、かゝる態度を高貴の徳に反せずして執得る爲には、我々の内心が清淨で**無礙**でなければなら

1. 静
2. 静
3. 静
4. 静
5. 静
6. 静
7. 静

あらう。自分がここに擧げたのは人間らしさの階段に於て、卑しむべき表出である。人間らしい表出として卑みに洩れ得るものは、神の目に於ても、少くとも愛するに堪へたものと成り得るであらうと信ずるからである。しかし、我々は天使らしい階段より自己の卑しさを省得るまで向上することを願はなければならぬ。

超克

二三 麒麟その一

谷崎潤一郎

鳳兮鳳兮。何徳之衰。

往者不可諫。來者猶可追。已而已而。今之從政者殆而。

西曆紀元前四百九十七年左丘明孟軻司馬遷等の記録によれば、魯の定公が十三年目の郊の祭を行はれた春の初、孔子は數人の弟子たちを車の左右に従へて、その故郷の魯の國から傳道の途に上

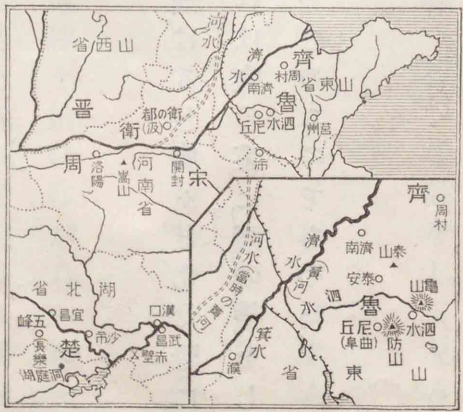
(一) 論語にある。
(二) 學者。周代魯の孔子の門人。
(三) 學者。春秋左氏傳を著した。
(四) 學者。前漢の公羊といふ。史記を著した。

天地の記
解式
傳入の

つた。

泗水の河の畔には芳草が青々と芽ぐみ、防山、尼丘、五峰の頂の雪は溶けても沙漠の砂をつかんでくる匈奴のやうな北風は、いまだに烈しい冬の名残を吹送つた。元氣の良い子路は紫の貂の裘を翻して、一行の先頭に進んだ。考深い眼つきをした顔淵、篤實らしい風采の曾參が、麻の履を穿いてその後に續いた。正直者の御者の樊遲は、駟馬の銜を執りながら、時々車上の夫子が老顔を窺み視て、傷ましい放浪の師の身の上に涙を流した。

或日愈、一行が魯の國境までやつてくると、誰も彼も名残惜しうに、故郷の方を振返つたが、通つて來た路は龜山の蔭に隠れて、見



(一) 孔子の門人仲由。志剛直であつた。

(二) 孔子の門人。字は子與。世に曾子といはれた。魯の賢才の譽が高かつた。

一カ
乙正直

(一) 琴曲の歌で、
文體明辨卷九
に出で居る。
「子欲居魯
兮、龜山蔽之、
手無斧柯、何
奈龜山何。」

何を氣にかん
ふアか
ふ、
ふ、
ふ、

えなかつた。すると孔子は琴を執つて、

われ魯を望まんと欲すれば

龜山これを蔽ひたり。

手に斧柯なし、

龜山をいかにせばや。

かういつて、さびた皺がれた聲で唄つた。

これからまた北へ北へと三日許旅を續けると、廣々とした野に、

安らかな屈託のない歌の聲が聞えた。それは鹿の裘に索の帶をし

めた老人が、畦路に遺穂を拾ひながら、唄つてゐるのであつた。

「由や、お前にはあの歌がどう聞える。」

と、孔子は子路を顧て尋ねた。

「あの老人の歌からは、先生の歌のやうな哀な響が聞えません。大

空を飛ぶ小鳥のやうな、恣な聲で唄うて居ります。」

(一) 姓は李。字は
聃。老子は尊
稱。楚の苦縣
の人。支那道
教の祖。
(二) 春秋時代の人。
歿年百歳とい
ふ。

「さもあらう。彼こそ古の老子の門弟ぢや、林類といつて、もはや百
歳になるであらうが、あの通り春がくれば畦に出、何年となく
歌を唄うては穂を拾うてゐる。誰か彼處へ行つて話をして見る
がよい。」

かういはれて、弟子の一人の子貢は、畑の畔へ走つて行つて老人

を迎へ、尋ねていふには

「先生はさうして歌を唄うては、遺穂を拾つていらつしやるが、何

も悔いるところはありませぬか。」

しかし、老人は振向もせず、餘念もなく遺穂を拾ひながら一歩一

歩に歌を唄つて止まなかつた。子貢がなほもその跡を追うて聲を

かけると、漸く老人は唄ふことをやめて、子貢の姿をつくづく眺め

た後、

「わしに何の悔があらう。」

人か行
三時
少
ト

といつた。

「先生は幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子なく漸く死期が近づいてゐるのに、何を樂みに穂を拾つては歌を唄うておいでなさる。」



(筆仙墨田島) 哲四の子孔
一のそ

すると老人
はからからと
笑つて、
「わしの樂み
とするもの

は、世間の人々が皆もつてゐて、却つて憂としてゐる。幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子もなく、漸く死期が近づいてゐる。それだからこのやうに楽しんでゐる。

「人は皆長壽を望み、死を悲しんでゐるのに、先生はどうして死を



(筆仙墨田島) 子 孔

樂しむこと
ができます
か。
と、子貢は重ね
てきいた。

一度往つて一度返るのぢや。ここで死ぬのは、かここで生まれるのぢや。わしは生を求めて齷齪するのは惑ぢやといふことを知



(筆仙墨田島) 哲四の子孔
二のそ

つてゐる。今死
ぬるも昔生ま
れたのと變り
はないと思
つてゐる。

人か行
三時
少
ト

老人はかく答へて、また歌を唄ひだした。子貢には言葉の意味がわからなかつたが、戻つて来てそれを師に告げると、

「なかなか話せる老人であるが、しかし、それはまだ道を得て至りつくさぬものと見える。」

と、孔子がいつた。

それからまた幾日も幾日も長い旅を續けて、箕水の流を涉つた。夫子が戴く縹布の冠は埃にまみれ、狐の裘は雨風に色褪せた。

魯の國から孔丘といふ聖人が來た。その人は暴虐な私たちの君や妃に、幸な教と賢い政とを授けてくれるであらう。」

衛の國の都に入ると、巷の人々はかういつて、一行の車を指さした。その人々の顔は饑と疲とに瘦衰へ、家々の壁は嗟きと愁みとの色をたゞへてゐた。その國の麗しい花は、宮殿の妃の眼を喜ばす爲に移し植ゑられ、肥えた豕は妃の舌を培ふ爲に召上げられ、長閑な

ソコトシトカ

ソコトシトカ

1. 五色の虹

2. 他

3. 血

4. 帝

トカ、トシトカ

春の日が灰色に寂れた町をいたづらに照らした。さうして都の中央の丘の上には、五彩の虹を繡出した宮殿が、血に飽いた猛獸の如くに屍骸のやうな街を瞰下してゐた。その宮殿の奥で打鳴らす鐘の響は、猛獸の嘯くやうに國の四方へ轟いた。

「由や、お前にはあの鐘の音がどう聞える。」

と、孔子はまた子路に尋ねた。

「あの鐘の音は、天に訴へるやうなはかない先生の調とも違ひ、天にうち任せたやうな自由な林類の歌とも違つて、天に背いた歡樂を讚へる、恐しい意味を歌うて居ります。」

「さもあらう。あれは昔、衛の襄公が、國中の財と汗とを絞り取つて造らせた林鐘といふものぢや。その鐘が鳴る時は、御苑の林から林へ反響して、あのやうなもの凄い音を出す。また暴政に苛まれた人々の呪と涙とが封じられてゐて、あのやうな恐しい音を出

と孔子は教へた。

二四 麒 麟 その二

衛の君の靈公は、國原を見晴す靈臺の欄に近く、雲母の硬屏瑪瑙の榻を運ばせて、青雲の衣を纏ひ、白霓の裳裾を垂れた夫人の南子と、香の高い秬鬯を酌交はしながら、深い霞の底に眠る野山の春を眺めてゐた。

「天にも地にも、麗かな光が泉のやうに流れてゐるのに、何故私の國の民家では美しい花の色も見えず、快い鳥の聲も聞えないのであらう。」

かういつて、公は不審の眉を顰めた。

「それはこの國の人民が、我が公の仁徳と、我が夫人の美容とを讃

1. 支那の古く文王の
物見
2. 衛王の同じ
3. 白霓の
4. 秬鬯のやうな
5. 酒の類

1. 植ゑられた
2. 天子の車
3. 玉の飾り
4. 帝堯の臣
5. 帝堯の臣

(一)帝堯陶唐氏。
支那古代の聖王。
(二)舜に仕へた賢臣。
(三)支那春秋時代の鄭國の賢相。
(四)支那古代の聖王。夏の國の始祖。

5. 夫人の例
4. 南子の例
3. 南子の例
2. 南子の例
1. 南子の例

へる餘り、美しい花とあれば、悉く献上して宮殿の園生の墻に移し植ゑ、國中の小鳥までが、一羽も残らず花の香を慕うて、園生のめぐりに集るからでございます。」

と、君側に控へた雍渠が答へた。するとその時、寂れた街の静けさを破つて、靈臺の下を過ぎる孔子の車の玉鑾が珊々と鳴つた。

「あの車に乗つて通るものは誰であらう。あの男の額は堯(一)に似てゐる。あの男の目は舜(二)に似てゐる。あの男の項は臯陶(三)に似てゐる。肩は子産(四)に類し、腰から下が禹(五)に及ばぬこと三寸許である。」

と、これも側に伺候してゐた將軍の王孫賈が、驚の眼を見張つた。「しかし、まああの男は何といふ悲しい顔をしてゐるのだらう。將軍、卿は物識だから、あの男がどこから來たかわらには教へてくれたがよい。」

かういつて、南子夫人は將軍を顧み、走り行く車の影を指さした。

1. 流の世に
 2. 在る物集る後人
 3. 顔カタク
 4. 手北十聖ししる楽
 5. 天女
 6. 如満南齊スル
 7. 技能ヲモツニナル

私は若い頃諸國を遍歴しましたが、周の史官を勤めてゐた老聃といふ男の他には、まだあれほど立派な相貌の男を見たことがありませぬ。あれこそ故國の政に志を得ないで、傳道の途に上つた魯の聖人の孔子であらう。その男の生まれた時、魯の國には麒麟が現れ、天には和樂の音が聞えて、神女が天降つたといふ。その男は牛の如き唇と、虎の如き掌と、龜の如き背とをもち、身の丈が九尺六寸あつて、文王の容體を備へてゐるといふ。彼こそその男に違ひありませぬ。

かう王孫賈が説明した。

「その孔子といふ聖人は、人にいかなる術を教へるものであるか」と、靈公は手に持つた盃を乾して、將軍に問うた。

「聖人といふものは、世の中のすべての知識の鍵を握つて居ります。しかし、あの人は専ら家を齊へ、國を富まし、天下を平げる政の

道を、諸國の君に授けると申します。」

將軍が再びかう説明した。

「わたしは世の中の美色を求めて南子を得た。また四方の財寶を萃めてこの宮殿を造つた。この上は天下の覇を唱へて、この夫人与宮殿とにふさはしい權威をもちたく思つてゐる。どうかしてその聖人をここへ呼びいれて、天下を平げる術を授けたいものぢや。」

と、公は卓を隔てて對してゐる夫人の唇を覗つた。何となれば、平生公の心をいひ表すものは、彼自身の言葉でなくつて、南子夫人の唇から洩れる言葉であつたから。

「わらはは世の中の不思議といふものに遇つて見たい。あの悲しい顔をした男が眞の聖人なら、わらははにいろいろ不思議を見せてくれるであらう。」

1. 美人
 2. 権力
 威勢

かういつて、夫人は夢見るやうな瞳を上げて、遙かに隔り行く車のあとを眺めた。

孔子の一行が北宮の前にさしかゝつた時、賢い相をもつた一人の官人が、大勢の供を従へ、^(一)屈産の駟馬に鞭うち、車の右の席を空けて、恭しく一行を迎へた。

私は靈公の命を受けて、先生をお迎に出た仲叔圉と申すものでございませう。先生がこのたび傳道の途に上られたことは、四方の國々までも聞えて居ります。長い旅路に、先生の翡翠の蓋は風に綻び、車の輓からは濁つた音が響きます。願はくはこの新しい車に召替へられ、宮殿に駕を枉げて、民を安んじ國を治める先王の道を、我等の公に授け給へ。先生の疲勞を癒す爲には、西圃の南に水晶のやうな温泉が沸々とたぎつて居ります。先生の咽喉を濕ほす爲には、御苑の園生に芳しい柚橙、橘が甘い汁を含んで實の

(一)屈は晋の地名。良馬を産する。

1. 屈産の駟馬に鞭うち、車の右の席を空けて、恭しく一行を迎へた。
2. 翡翠の蓋は風に綻び、車の輓からは濁つた音が響きます。
3. 願はくはこの新しい車に召替へられ、宮殿に駕を枉げて、民を安んじ國を治める先王の道を、我等の公に授け給へ。
4. 先生の疲勞を癒す爲には、西圃の南に水晶のやうな温泉が沸々とたぎつて居ります。
5. 先生の咽喉を濕ほす爲には、御苑の園生に芳しい柚橙、橘が甘い汁を含んで實の

つて居ります。先生の舌を慰める爲には、苑圍の檻の中に、肥太つた豕、熊、豹、牛、羊が、藁のやうな腹を抱へて眠つて居ります。願はくは二月も、三月も、一年も、十年も、この國に車を駐めて、愚かな私たちの曇つた心を啓き、盲ひた眼を開き給へ。」
と、仲叔圉は車をおりて、慇懃に挨拶をした。

「私の望むところは、莊麗な宮殿をもつ王者の富よりは、^(一)三王の道を慕ふ君公の誠であります。萬乗の位も、桀紂の奢の爲には、なほ足らず、百里の國も、堯舜の政を布くには、狭くはありませぬ。靈公がまことに天下の禍を除き、庶民の幸を圖る御志ならば、この國の土に私の骨を埋めても、悔いませぬ。」

かく孔子は答へた。
やがて一行は導かれて、宮殿の奥深く進んだ。一行の黒塗の沓は、塵も止めぬ砥石の床に、憂々と鳴つた。

(一)三代の聖王。夏の禹王、殷の湯王、周の文武二王。
(二)夏の桀王、殷の紂王。

1. 肥太つた豕、熊、豹、牛、羊が、藁のやうな腹を抱へて眠つて居ります。
2. 願はくはこの新しい車に召替へられ、宮殿に駕を枉げて、民を安んじ國を治める先王の道を、我等の公に授け給へ。
3. 先生の疲勞を癒す爲には、西圃の南に水晶のやうな温泉が沸々とたぎつて居ります。
4. 先生の咽喉を濕ほす爲には、御苑の園生に芳しい柚橙、橘が甘い汁を含んで實の

(一) 詩經、魏風、葛屨篇に出てる。一、糾々葛屨。可二以履之。可三以縫之。可四以縫之。可五以縫之。

摻々たる女手

以て裳を縫ふべし。

と、聲をそろへて歌ひながら、大勢の女官が箴の音高く錦を織つてゐる織室の前も通つた。錦のやうに咲きこぼれた桃の林の蔭からは、苑囿の牛の懶げに呻る聲も聞えた。

靈公は賢人仲叔圉のはからひを聽いて、夫人を始め一切の女を遠ざけ、歡樂の酒の泌みた唇を濯ぎ、衣冠正しく孔子を一室に請じて、國を富まし、兵を強くし、天下に王となる道を質した。

しかし、聖人は人の國を傷つけ、人の命を損ふ戦のことに就いては、一言も答へなかつた。また民の血を絞り、民の財を奪ふ富のことに就いても教へなかつた。さうして軍事よりも、産業よりも、第一に道德の貴いことを嚴かに語つた。力を以て諸國を屈服する覇者の道と、仁を以て天下を懐ける王者の道との區別を知らせた。

仁徳の道
孔子の道
覇者の道

「公がまことに王者の徳を慕ふならば、何よりもまづ私の慾にうち克ち給へ。」

これが聖人の誠であつた。

その日から靈公の心を左右するものは、夫人の言葉でなくつて、聖人の言葉であつた。且には廟堂に參して正しい政の道を孔子に尋ね、夕べには靈臺に臨んで天文四時の運行を孔子に學んだ。錦を織る織室の箴の音は、六藝を學ぶ官人の弓弦の音、蹄の響、筆、策の聲に變つた。一日公は朝早く獨り靈臺に上つて國中を眺めると、野山には美しい小鳥が囀り、民家には麗しい花が咲き、百姓は畑に出て公の徳を讚へ歌ひながら、耕作にいそしんでゐるのを見た。公の眼からは熱い感激の涙が流れた。

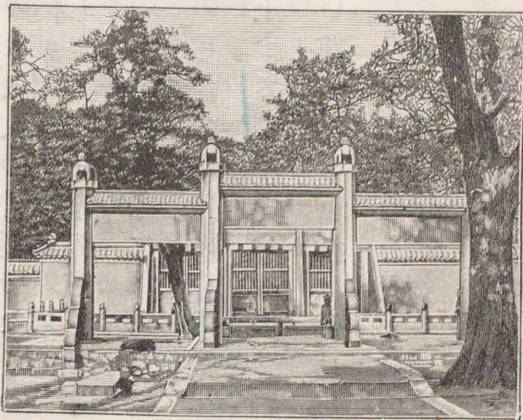
1. 聖人の徳を慕ふ
2. 孔子の道
3. 覇者の道

(一)名は柳次郎。戲號を戴野棟十といふ。熊本縣の人。
 (二)孔子廟のこと。支那山東省曲阜に在る。
 (三)孔子の後裔に當る人でこの曲阜の名族として居る。その人の住宅をかく稱する。その附近を監理する役所の名となつて居る。
 (四)孟子から出た語。

孔子の故郷〔自修文〕

(一)大成殿參拜に出かける。四時過ぎてゐる。最早暮れるに間がない。大きな門を入ると廣場がある。右に大きな邸宅がある。これが衍聖公府だと教へられた。その隣が即ち聖廟である。金聲玉振」と題した門を入つて、次々にいくつかの門を潜つた。役人だか番人だかが五六人ゐた。遅いから參拜はできぬといふのを、日本から來た衍聖公へ紹介狀持參のものだといつて、開門させた。

境内は柏が天を蔽うてゐる。莊嚴な殿堂樓閣が相連なつてゐる。大成殿の石柱の如きはエジプト、アラビヤ、ギリシヤ、ローマの建築に比して譲るところがない。その巨大な點に於ても、柱を捲く雙龍の彫刻の意匠技能に於ても、また支那の誇であるといふのを、なるほどさうだらうと驚歎して、柱を撫でまはして見



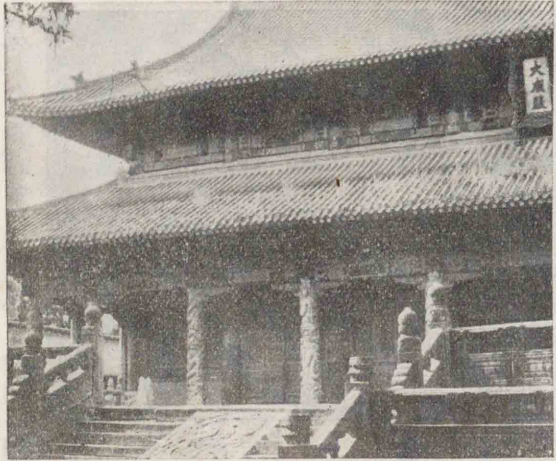
金聲玉振門

(一) 濼川 玄耳

怎麼生
 宋時代の俗語
 として「いかに」
 の義

(一)程頤のこと。
 明道先生といふ。宋時代の學者。元豐八年(西暦一〇八五年)歿。

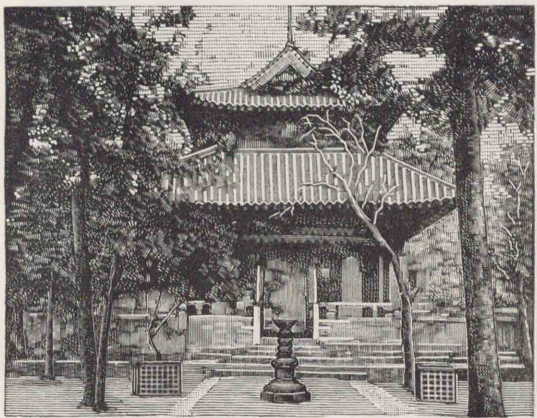
た。忙しい中に、案内人は傍の石欄の柱を平手で敲いて余を招く。何かときけば、黙つてまた敲く。奇なるかな。例へば釣鐘を平手で敲いたやうに、金屬のやうな響がする。余は賢し氣に外の二三本の石柱を試みて見たが、一個もそんな響はない。皆頑然たる石の音、いたづらに掌が痛かつた。案内者は怎麼生といつたやうな顔で、余を顧て一笑する。



大成殿

孔子に對する渴仰者には幾種類がある。程子はいく、「論語を讀むに、讀了の後全然事なきものあり。讀了の後一兩句を得て喜ぶものあり。讀了の後これを好むことを知るものあり。讀了の後直ちに手の舞ひ足の踏むところを知らざるものあり」と。この最後の歡喜者が、眞に渴仰信心の輩である。

(1) Jerusalem.
アジヤトルコ
のシリヤの都
キリストの墳
墓の地。
(2) Mecca.
回々教の聖都。



杏 壇

支那は歴代概ね試験を以て官を採つた。支那の試験には儒學の知識が基礎であつた。随つて支那に於ける孔子教の勢力は、一面に於て法制の力を借りて普及したと謂つてよい。これに加へて、歴朝の帝王が政略的に尊敬を加へたので、孔子は國教的本尊となり、曲阜は支那のエルサレム、メッカとなつた。そしてその殿堂樓閣は全く宗教的に莊嚴を極めてゐるのである。孔子廟は孔子の住家の跡に建てたものと傳へられてゐる。境内に種々な遺蹟がある。杏壇といふのは、孔子がその門徒に教を説いた所ださうだ。孔子手植の柏といふのもある。何度か焼け、何度か枯れて、また芽生が出たのだといふ。いづれも餘りあてにはなるまい。門の内に入れば、ここも古柏が茂つてゐる。他に比して多く人の入らない所と思し、地面は濕つて、草が高く、枯枝など散らばつて、何となくもの寂しい。

達人
いるいな意
味があるが、
ここでは人生
を達観した人
を達人。
委吏
政府の米倉を
掌る役人。

遊説

恰も月が昇つてゐる。歩くうちに訝えわたつて、柏樹の影が濃くなつてくる。奥の方に二三の碑が建ててある、「孔宅故井」と誌してある。案内者はいふ、「他喫の水」と。「彼が飲んだ水」といふ意である。孔子は屢、餓死に瀕したことがあつた。達人は當時に容れられないものに定まつてゐる。幾度か仕官して、幾度か免職になつてゐる。偶、その成功した官歴もあるが、それは變な職務である。「初め委吏となり、料量平かなり。次に司職吏となり、畜蕃息す」と褒められてゐる。司職吏といふのは、犠牲の牛羊を繫養する所の役人である。牛飼の親方である。これは青年時代の成功で、後は失意の境に在つて修養したものらしい。その再び出て仕へたのは五十を過ぎてからである。工部大臣となり、司法大臣となり、總理大臣心得となつたが、やり過ぎて失敗した。爾來どうにかして志を行はうと、十數年間諸侯に遊説したけれども、遂に大いに用ひられる機會がなくて、子弟と共に専ら詩書を講ずることになつた。しかし、その全く仕官に念を斷つたのは六十八歳であるから、孔子の功名心は随分旺盛であつたと謂はねばならぬ。余は孔子を天成の聖人とは思

(一) 濹川玄耳著。一日露戰役。從軍三年。一と日敵。一とを合冊した。

(二) 文德天皇の第一の皇子。小野宮と申す。

(三) 在原業平。

(四) 河内國(大阪府)北河内郡。牧野村に在つた。

2 歌
い
の
御
室
の
歌

はない。修養の人、努力の人、精力の人として尊敬するのである。——小敵大敵——

二五 小野の御室

昔(二)惟喬の親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、その宮へなんおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人(三)を常におはしましけり。狩は懇にもせで、大和歌にかゝれりけり。今狩する交野(四)の渚の院の櫻ことにおもしろし。その木の下におりゐて、枝を折りてかざしにさして、皆歌詠みけり。馬の頭なりける人の詠める、

よの中にたえて櫻のなかりせば

春のこゝろはのどけからまし

また人の歌

散ればこそいとど櫻はめでたけれ



小野御室

増田牧山筆

大殿ごもる
九路の御
ハルマ
ト

ハ断所
ニ賢
入リ終
フニ

(山城國(京都府)愛宕郡)

う、き世になにか久しかるべき

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで物語して、さて主人の皇子入りて、大殿ごもり給ひなんとす。十日餘りの月も隠れなんとす



在原業平(奈不良退寺藏)

れば、かの馬の頭の詠める、

あかなくにまだきも

月のかくる、か

山の端にげて

入れずもあらなん

かくしつ、詣で仕うまつりける

を、皇子思の外に御髪おろさせ給ひ

て、小野といふ所に住み給ひけり。正月に拜み奉らんとて詣でたる

に、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室に詣でて拜み奉る

に、つれづれといとももの悲しくておはしましければ、稍久しくさぶ

1. 世にまじりつゝの又何俟
しにやもい
さすつて世の中を改

らひて、いにしへのことなど思ひ出でて聞えさせけり。さてもさぶ
らひてしがなと思へど、公事どもありければえさぶらはで、夕暮に
歸るとて、

忘れては夢かと思ふ思ひきや

ゆきふみわけて君を見んとは

とてなん泣く泣く來にける。

— 伊勢物語による —

二六 あげ雲雀

梅一輪一輪づゝのあたゝかき。

鶯の身をさかさまに初音かな。

なにごとど花見る人のなが刀。

世の中は三日見ぬ間に櫻かな。

雲雀より上にやすらふ峠かな。

嵐雪

其角

去來

蓼太

芭蕉

春の海ひねもすのたりのたりかな。
茶の花や月は東に日は西に。

同 蕪村



其角筆蹟

蓬萊の松に
立てはやす
ねの松
其角

(一) 姓は井原。大
阪の人。俳人
で小説家。元
禄六年(一三
五三年)歿。三
五十二。

二七 雨の興

松平定信

けろりくわんとして鳥と柳かな。
長持に春かくれゆく衣がへ。

(一) 茶
西鶴

「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄みわたりぬるものなれ。
されど闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風高く吹きかふは、
また優りぬるやうに覺ゆ。」といへば、雨ぞいと優りぬるを。といふ。
かにと問へば、「いでや早天の雨はさらなり。草木の花咲き實のるも、

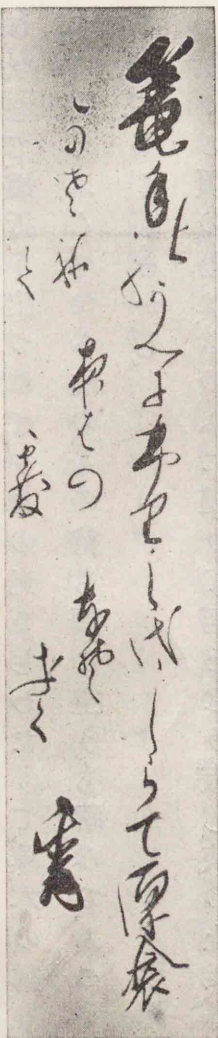
軒の玉水
蜘蛛のい

皆この惠にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、げふは元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春かなとぞ思ふめる。師走の晦のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞みわたりて、いとこまやかに降れるが、衣潤ほせども、降るとは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、住棄てし蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に緑稍添行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、ともにいと長閑なり。燈火挑げても、何となく光濕りたるに、鐘の音のほかに響きくるも、心澄みわたりぬるものぞかし。その外梅が香の濕り、夜深く匂ひわたるも、花に憂しと歎ちぬるも、哀はありけり。春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。

杜鵑の初音いかにと思ふ頃、むら雨のはらはらと降出でたるも、五月雨の幾日も降暮して、書の卷々繰返しつゝ、ゐたれば、何となく

ム花カニかつまぬ
ト布止ニあつるも
3. 待つ
2. 待つ
1. 待つ

世の中のことに遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬ頃、雲の漲り出づる勢ありて、風一しきり吹落ちたるに、柳蓮なんどの葉裏白く見せたるも、涼しやがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降來て、もの音も聞えず、土の匂ひくるもい



平定信筆蹟

籠手のうへにふりしを
しらして厚衾
かさねて夜
はの霰をそ
きく
樂翁

と心地よし。軒端は玉の簾かけたらんやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭は一つ湖になりて、あるは瀧落し、または水走らせたるに、人々暫しものいはで、うち守りゐたるもをかし。稍雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へ躍り出でて餌拾ふさまなり。初め雲の立出でし方は、はや空の初入縁に見えて、虹なん

5. 雨
4. 雨
3. 雨
2. 雨
1. 雨

線言

とよむ

ど見ゆるに、木々の緑の庭^{にはたづみ}に影見ゆるもいと涼し。老いたる女な
 ど雷の音に驚きてはひ出でたるが、けふのは幼かりし時のごとよ
 く晴れにけり。今時のはかく晴るゝこと稀なり。『なんど、はや線言い
 ふもあり。彼はかくあわてし。』などいひて、かたみに笑ひとよみつゝ、
 『けふは蚊も少かるべし。雷の音もいと微かなり。この頃の暑さも忘
 れぬ。』とて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉な
 すに、肥えふくれたる蛙のもの、待ち顔に空うち睨みて、ふつゝ、かな
 る音に鳴くもをかし。

外山

秋くる頃の雨は、きのふに變りて何となう寂し。荻の上風、^{トヤマ}外山の
 鹿の音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞馴れし筧の水
 の音までも、哀深くこそ。月の前のむら雨もまたをかし。まいて稍夜
 寒の頃、鳴枯したる蟲の音の、雨のをやみに幽かなる聲して、枕近く
 鳴きよるも哀なり。この雨に木々も染めなんと思へば、茸なども生

つきづきし

しおどろおどろ

出でなん。栗も早落つべし。『など、童のもの寂しげに燈に向かひつゝ、
 言出づるも、げにさまざまなり。夜深き鐘の音のうち、濕るものから、
 さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、今は世に亡き友のことも思ひ
 出でて、鐘撞く人の心をも哀と思ふばかり、感情は深かりけり。紅葉
 の染添ふも、白菊の移り行きで一盛見するも、尾花の露重げにうち
 萎れたるに、龍膽の怨深く咲きたるあたりもつきづきし。朝顔の皆
 枯れたる中に、さゝやかに赤う咲出でたるが、晝過ぐるまでも凋み
 後れたる、また哀なり。野分の風はおどろおどろしきものから、雨は
 夕立に劣らざれど、さすがに哀を添ふるは秋の習なるべし。時雨の
 さと音して、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。
 月よりも、闇の夜よりも、哀深きものにははべらずや。』といへば、かう
 やうに言並べては、げにもといふべからんが、一年も降る心地して
 よみ見れば、この雨はをとつ日より降出でしをと思ふ心は變らじ

と、心の中に思ひて聽きあしむも、またをかしかりけり。——花月草紙——

二八 春と人

上 田 敏

生命の中流に棹さして十分に世の苦樂を味はひ、自己の意識を強めようとするものは、草木の角ぐみわたる春の日を浴びて、失はれた力のとみに復歸するを感じ、新しい熱意を以て諸の印象を迎へる。郊外にも、都會にも、自然の風色に、人事の活動に、春光と生氣とが漲りわたるのだから、彼岸から八重までの櫻時ばかりでなく、木瓜も、海棠も、薔薇も、堇も、蓮華、蒲公英も、垣根の若葉も、鳥の聲も濃やかに懐かしく、しとしとと降る春の雨、花見歸の土手の上、上潮と共に春愁をもたらす夕暮の風、さまざまな夢思はせる靜寂な池の汀に、菖蒲咲く頃も過ぎて、瑠璃色めいた碧空に、白い雲がふわふわと動いて行く春と夏との界までも、すべての景物は多感な人に迫つ

春愁

官能



上 田 敏

て來て、快くも亂心地ならしめる。世人動もすれば因襲に囚れて、睦月、衣更着、彌生の三月を春とし、櫻花の散るのを見て、季すでに過ぎたとするものもあるが、それは眞に春の心を解したものでない。春は淺いもよく、盛もよく、たけなはなるもよい。
春はたゞ人の心を浮立たせて、氣輕な戯に赴かしめるのではない。この時麗しい萬物は、生の惱を感じて、精力の横溢に壓迫される。そこに創作の苦痛がある。芽ばへ花咲くことは一種の緩和であつて、いはば重荷を下した時の安心に過ぎぬ。さればこの春色に對する人間の心も、萬物の活動に同情し、共鳴して、ここに平行した變化を感じ、偉大にして深沈たる大自然の節奏に合するのである。若し花を看てたゞ單純な官能の快感を貪る

靜觀

のみならば、同じ色の造花を見てもよいはずであるが、天然の千紫萬紅には、それ以上の深い意味が自ら籠つてゐて、思邪なき靜觀の人心に通ずる。舊くしてしかも常に新しい春のめぐり來て、我等の今更に胸さわぎするのは、この大自然の脈搏を感ずるからである。爽快な夏もおもしろく、靜閑にして豊かな秋も楽しく、寂としてまた自ら人に勇あらしめる冬も佳いが、自然の胸を抱く春の心は、年毎に變りなく切である。

誰いひそめた言葉であらうか、イタリーの古歌に、春は一年の若き時、若き時は一生の春とある。春を愛するは若きを愛するのだ。春を惜しむのは青年の去易きを惜しむのだ。生と、死と、美と、悦と、愁と、愛とを歌ふ古今の抒情詩には、老と若さとの對照がいつも伴奏をつけてゐる。あゝ、少年にして智あらば、老年にして力あらばと、繰返し繰返し歌ひ續ける古の智慧を聽く毎に、春と少年とのあわたゞ

雷同

しく過行くのが惜しくて堪らぬ。けふをつかめ。」とローマの詩人は教へ、手折れよ薔薇を、花咲くひまに。けふがあすある世でもなし。」とドイツの詩にもいふ。この一見していかにも無分別な料簡は、尋常の道學者や、考もなく口先でこれに雷同する俗流の思ふほどしかく思慮のない説ではない。智と力といづれか尊い。よしや智淺くとも、生命の水は汲みえられる。力なくては泉の傍へも近寄れまい。初は淺かつた智も、苦樂の經驗に依つて、終に自らを深くする例はあるが、年少にしてその世の春にふさはしい思と行とがなく、徒に老成を期して空しく貴重な光陰を費すのは、怯にあらざれば鈍である。この類の人、偶、老いこし方を顧て一代の好機會を逸したのを悔む時、口にこそ出さないが、心中はさぞ残念なことであらう。

春の光の波に浮かんで、暢びやかに朗かに生を楽しめ。時が食みへらす人間の力も、萬物の復活に交感して補はれて行く。しかもま

た春の樂みには、愁もあり、悦もあり、惱もあつて、それが我等の生活力を刺戟し、促進する。かくて晩春の候、膚滑かに筋も弛んで、稍倦怠を感じるのは、勢力過剰の爲であらうか。續いてくる夏秋の努力に具へる準備とも思へる。年毎の春の光を身に浴びて、心の奥まで浸つて居れば、老はおのづと退散する。人若し熱情を以て春を追求したなら、その追求の間に自然と力は加り、老はせきとめられよう。

春の恵を輕んずるのは大の料簡違である。天の與ふるを取らないと罰が當る。尤も一年中の氣候が餘り温暖であつて、凛烈な冬の寒氣と寂莫とを痛切に感じない時は、勿體なくも春の有難みを忘れ易くなる場合がある。例へば、日本の太平洋岸、殊に東海道及びそれより西南部に住まふ人々の中には、また春が來たかくらゐの微温な感じを抱くものもあらう。しかし、それでは實にせつかくの樂しい世界を自分で狭くするのである。對照は眞にももの味を強め

(St. Gothard)
スピス中央部に連なるアルプス山脈のト
ンネル。長さ
九哩餘。

(Airolo)
聖ゴタールの
トンネルの南
口。

るもので、白雪の冬よりして直ちに陽春の盛光に接すると、眼も眩むばかりの美に打たれることがある。往年私は歐洲觀光の途すがら、スピスから嶺南清明の天地に移らうとした時、聖ゴタールのトンネルに入る前までは、連山湖面悉く飛雪に蔽はれて、冷たい白い夢の中を通る心持であつたが、汽車が暫く暗黒道を過ぎて、忽ち青天の白光に接するや、思はず聲を揚げて、南歐の讚美を唱へた。アイロロといふ里にかゝつた頃、南の方遙かにイタリーの平原が黄金の光に浮かんで、なごのわたりかと思ふばかりなのを望んだ時、つくづく春の徳を思つた。

若い美しい娘が餘りに手を大事にしてゐるのを見て、或人が「どうせ、しまひには萎びてしまふ手ではないか。」と、たしなめるつもりでいつたところ、或夫人は口を挿んでいつた。しかし、今はまだ萎びてゐない。と、人生に對する最も賢明な態度は、この一言に含まれて

取越苦勞

(一) 劇作家。文學士。本名山本勇造。栃木縣の。明治二十年生。
(二) 輕井澤の西一里半。

ある。楽しい日に楽しめ。悲しみたければ悲しい日が来てからにするがよい。その時でも若しできるなら、自分の悲みをもつて近くの人々に氣持わるがらせずに濟ませたいものだ。傳道の士がいつた如く、すべてに時がある。播く時もある。収穫する時もある。楽しむ時もある。悲しむ時もある。そして春の日は楽しむ時である。躊躇なく、心配なく、取越苦勞なく、暢びやかに、朗かに春の生を楽しめ。

— 思想問題 —

坐り (自修文)

山本 有三

去年の夏は、大部分輕井澤の先の千ヶ瀧で暮した。そこから輕井澤へ行くには、是非とも一旦沓掛驛に出なくつてはならない。ところが沓掛と輕井澤との間は、街道と鐵道線路とが殆ど平行してゐるので、その間を自動車で通ると、よく汽車と競走することがある。或日自動車で輕井澤へ出かけたところが、偶然うしろから上りの列車が来て、追越して行つた。運轉手はそれを見ると、急

競走意識
競走をしよう
といふ心。

(Heavy) Heavy.
「へビー」をかけるとは、最大速度を出すこと。
危くすすんでのこと

に競走意識を湧きた、せて、ぐつと速力を早めた。それで暫くの間は、両方に殆どすれすれになつて進行してゐた。

ところが、往來を向ふから荷車が一臺とぼとぼとやつて來た。街道といつても田舎の道であるから、荷車と自由にすれ違ふだけの廣さはない。いきほひこちらは荷車の通り過ぎるまで速力を緩めないわけにはいかなかつた。思はぬ障害物の爲に可なり汽車に追越されてしまつたが、荷車をやり過すと、いきなり運轉手は猛烈なへビーをかけた。私は危く車の中に倒れようとした。

「ばかに速力を出すね。何哩だい。」

私はよろけながら尋ねた。

「五十哩です。」

運轉手は正面を見つめたまゝ、吐出すやうにいつた。しかし、その返事は前から來ないで、車の後の方で微かに響いた。

「そんなに出しちや危険だよ。汽車と競走なんかしたつて、はじまらないぢやないか。あたりまへの速力にし給へ。」

運轉手は何か答へたらしいが、五十哩の急速力は、それをどこかへ吹飛ばしてしまつた。

私は車の中にさがつてゐる帶皮にぎゆつとつかまつてゐたが、それでも幾度かはふり出されさうになつた。その瞬間、嘗て譯したことのあるシュニツレルの短篇「死人に口なし」の一場面が、ちらつと頭に閃いた。それは自動車ではないが、馬丁がやけに馬を走らせた爲に、車體を顛覆させた一節である。

しかし、幸に何事もなかつた。新輕井澤の近衛公の別邸の前あたりに來た時には、こちらはまだ可なり汽車をぬいてゐた。そこまでくると、運轉手は勝誇つたやうな態度で、速力を徐々に緩めながら、平常の速力にかへした。私はほととした。それまでは車體の激動もたまらなかつたが、それ以上私を脅したものは、空氣の稀薄であつた。私は屢々息苦しさを感じたくらゐだつた。一時間五十哩といふ速力は、随分烈しいものだと思つた。

ところがその後、天文のことを書いた通俗な書物を讀んでゐたら、地球は何でも一秒間に三十哩とかの急速度で、太陽のまはりをぐるぐる廻つてゐるのだ

(Schmitzler) の小説家、劇作家 (西暦一八六六年)

(二) 輕井澤の南一里。

ものの數ではない、なんでもない、いふに足りない。

天動説 地球が宇宙の中心にあつて日月星辰は皆地球をめぐつてまはるといふ昔の對地動説の對地

といふ記事が目についた。すると、かたつといふ間に、私たちはもう三十哩も走つてゐるわけである。一時間なら十萬哩ものすばらしい速力になる。これに比べたら、一時間五十哩くらゐな速力は、ものの數ではない。それなのに私たちは、自動車を飛ばせると動揺や息苦しさをひどく感じながら、その何千倍もの速さで走つてゐる地球だと、そんな不安を絶対に感じないのは妙である。地球が急速度で廻轉してゐる爲に、目まひがしたとか、息切がしたとかいふものは、たゞの一人もありはしない。いや、それどころか、實際に於ては、地球が動いてゐるといふことさへ、私たちは意識したことがない。専門の學者がさういふから、「はあ、さういふものかな。」と思ふだけで、「あゝ、今地球が廻轉してゐる。」などと氣づくものは、誰ひとりないはずだ。今日では教育を受けた人なら、最早天動説を信ずるものはあるまいけれども、たゞ見た目の上からいふと、やつぱり太陽や月が動いて、地球は動かないものやうにしか感じられない。非常に速く動くものの方が、却つて私たちに感じないで、それよりは遙かに遙かに遅いものの方が、すばらしく速く動くやうに思はれるのは、實際不思議

議な現象といはなければならぬ。

この頃の子供は餘り獨樂を廻さないやうだが、私は小さい時分よく獨樂を弄んだ。そして獨樂が非常によく廻つて、まるで動かないやうに見える時、私たちはそれを「獨樂が坐る。」といつた。行儀が悪く踊を踊つたり、冠かぶをふつたりしないで、じつと不動の姿勢をとるところから、さういふ言葉が生まれたのだらう。いつ誰がいひだしたことが知らないが、おもしろい言葉だと思ふ。

しかし、「坐る」といふことは動かないことではない。一見動かないやうに見えるけれども、實は最も烈しく動いてゐることである。最も烈しく廻轉すればこそ、獨樂は始めて坐るのであつて、「坐り」は活動の絶頂である。

どんなにすばらしく活動してゐるやうに見えても、「動き」が見えるといふことは、力が弱い證據である。動いてゐるといふことは確かに「動いてゐる」とであつて、まだ「坐り」に達しない状態である。そして廻轉が弱いほど動きは一層よく見える。

一時間五十哩の速力といへば、私たちには非常な疾走であるが、しかし 或

求心力
或物が曲線運
動をなす時、
その中心の方
に向かつて引
けられる力。

意味からいへば、一時間たつた五十哩許の速力だつたからこそ動きが目立つて、烈しい動揺や息苦しさを覺えたのではあるまいか。地球が動かないやうに思はれるのは、地球が實にすばらしい勢で廻轉してゐるからである。一時間に十萬哩もの速力になると、私たちには却つて少しの動きも感じられないのだと思ふ。若しそれがわかるやうになつたら、その時は地球の力が非常に弱くなつた時である。いや、そんな時代が來たら、生物は地球の廻轉を感ずる前に、とうに地上から失はれてゐるであらう。(月に生物がゐないのは、廻轉する速力が遅い爲に、求心力が激減して、空氣を發散してしまふこともその一因であるといふ。)

ところが、動いてゐるものでなくつては活動してゐるのではないと思つてゐる人がある。

投げられたまゝでころころと轉がつてしまふものや、少し廻轉したと思ふ間もなく倒れてしまふ獨樂。

心の動くのは力の張りつめてゐない時である。

一生云々
一生十分に活
動しない人々
があるとの意。

禪門
禪宗の意。

(一)山本有三著
「途上」より採
録した。

殘丹零聖

一生坐らないでしまふ人々。
俳句や歌の方には動いてゐる句、動かない句、坐りといふことがある。
禪門で坐ることを大事なこととしてゐるのは、うなづかれる。
しかし、心棒を土の中に突つ刺して、獨樂が坐つてゐると思ふ人があればも
の笑だ。
坐らうとして坐られるものではない。力がはちきれ、勢が昂じて自ら坐るの
である。

獨樂が坐ることを子供たちはまた「澄む」といつてゐる。
まことに坐ることは澄むことである。

(一)山本有三の文に據る——

二九 我が國の文化

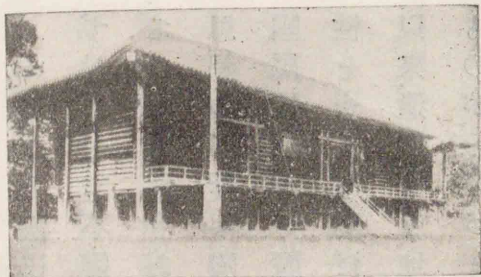
笹川 臨風

樹立もの古りたる春日の森のほとり、目も爽かに若草萌える三
笠山の麓、朱の宮居は自然の翠色と相映じて、古佛刹の殘丹零聖は

浮圖寶輪
花明柳暗

春信

將來



倉院

ありし世の榮華を語れる青丹よし奈良の舊都に遊び、轉じて郊外
に浮圖寶輪を落日の下に訪ひ、更に花明柳暗の京の都を逍遙し、洛
中洛外の遺蹟を探ると、そこに古日本の文化
が歴然として展開される。七堂伽藍の偉觀を
正 現じた斑鳩宮の名残なる法隆寺は推古朝の
文化を示し、東大寺、正倉院には天平時代の絢
爛たる文華を現存してゐる。日本の古文化が
院 その搖籃期にあつた時、脉々たる一道の春信
は、朝鮮半島より八重の潮路を渡つて我が國
に入り、文化の基を作つたのであつた。神功皇
后の三韓征伐は、まづ半島文化との接觸を開き、ついで應神朝に漢
學の傳來あり、その後工藝の將來があつたが、後年欽明朝に佛教の
渡來あつて、ここに外國文化の高潮を呈した。漢學の傳來は、支那の

儒教思想を朝鮮半島が傳承したのを輸入したのであるが、佛教思想に至つては、源を印度に發したのが、大月氏を経て支那に入り、更に流れ流れて朝鮮半島に渡り、これを我に傳へたのである。

いづれの國民にも國民性といふものがあるが、その國民性は必ずしも一定不變のものとはいへぬ。いかにも國民の血管に傳はつてゐる遺傳もあり、地勢なり風土なりの影響もあるが、外國の文化思想の影響は、國民性を知らず識らずのうちに變へて行く。今日の國民性は、長い歴史の間に影響されてでき上つたもので、この國民性を永久不變だと信ずれば、それは大なる錯誤である。しかし、建國以來、遺傳なり、地勢なり、風土なりで打つて固めた國民性の基なるものが、おのづと存在してゐることは否定すべきことではない。その基なるものは、即ち外國文化を同化すべき原動力である。

漢學の傳來があつて、我が國民性に多大の影響を及してゐるか。

(一) 應神天皇の時
來朝し、皇子
稚郎子にこれ
をお學びにな
つた。

(二) 難波津に咲
くやこの花冬
ごもり、今を
春べと咲くや
この花

處士

我が國民性の基即ち當時の國民性と、支那の國民性とは、自ら異なるものがあつたから、これを傳承するにも、そのまゝではなかつた。支那は國土の大と、易姓革命の國がらとで、國民氣質が概して消極的退嬰的であつた。支那の道德には少からず消極道德を教へてゐるのでも、その一般を推知するに難くない。これに反して、一體に機敏で、伶俐で、尙武の氣象が盛で、開國進取の風に富んでゐた我が國民性の基は、積極的で開發的であつた。はつと開いて雪の如くに散る櫻の花が、我が國民性の象徴であるとは、今もなほ稱せられてゐる。漢學が傳來し、支那の儒教思想が將來された時、朝鮮の博士王仁は梅を詠じて、^(一)「咲くやこの花」といつたといふことである。いかに梅花は支那の儒教思想、言換へると、支那古代の國民性を表したもので、雪霜の裡に凜たる芬香を放つてゐるところは、易姓革命の國に於ける處士氣質、即ち浪人氣質を表してゐる。支那詩人が梅花

を山中の高士と歌つたのはこの點である。義、周の粟を食はずに、首陽山に餓死した伯夷、叔齊は古代支那の理想人物で、梅花を絶愛した林逋は布衣の標本、悠然南山を見た陶淵明は處士の代表者であつた。梅花はこれ等人物の擬化されたものといつてよい。王仁が梅花を「この花」と稱したのは、いかにも儒教思想を表明したものである。しかし、平安時代に入ると、歌に詠まれて花と稱するのは櫻花であつた。陽春四月、駘蕩たる春色到らざる所なく、野には陽炎燃え、山には霞たなびく時、櫻花が半天に雲と見紛ふばかりに咲匂つたのは、いかにも陽氣で、生氣の潑刺たるものがあつて、梅花のどことなくしんみりとして陰氣なのとは、同じくない。この陽氣な國民氣質は所在に現れて、その文化は開發的に、進歩的に急速力を以て進展し、外國文化を傳承し、これを同化することをやめないのである。北方寒帯に近い地と、日本海に面する沿岸とは、季節に依つて陰

天に朝す

鬱を極め、雲低く垂れて、日光を漏らさないこともあるが、一般よりいへば、日本の地は氣候温和で、自然の景象は佳なりといつてよい。島國であるから、随つて規模は小さくあるが、四季をりをりの景色はまたなく美しい。八面玲瓏の玉芙蓉は、東海の天に朝して八朶の蓮華を開き、縹渺一萬頃の琵琶湖は、洋々として水に倒巒晴嵐を涵してゐる。山は紫に水は明に、瀬戸内海の烟波、關東、信越諸山の空翠、往く所として佳ならざるはない。雄大莊重の趣は乏しいが、典雅優美な風景には富んでゐる。随つて地勢の影響は、國民をして沈痛でなく輕快に、深からざるも廣く、哲學的でなくして寧ろ詩歌的とならしめた。更に佛教殊に禪の影響を受けて、頗るあきらめのよい氣質とならしめた。

日本は古來神ながらの道を傳へてゐる。随つて國民は敬神の念に篤い。祓ひ清めるといふ觀念からして、清淨潔白を好むに至つた

のは、固より當然である。佛教の感化を受けて肉食の風少く、また土地が狭いから、牧畜國民でなくして、農業國民であり、國を環つて海なるところから、食肉人種よりも、寧ろ魚介を食ふ人種であつた。建築は木造で、衣服は絹木綿の類であるが、天平時代、平安時代と、江戸時代以後の國民氣質を見ると、その趣味性に於て、非常な懸隔がある。この間に一區劃を描いてゐるのは、即ち東山時代である。支那の宋元時代の文化が、鎌倉時代頃から我が國に輸入され、禪宗も渡來し、東山時代に於てこれ等外來の文化宗教はその盛を極め、更に通俗的普遍的となつて、茶の湯の流行を來し、その影響は國民の衣食住及び趣味に及び、國民性にも少からぬ感化を來し、一般に恬淡を喜ぶ風となり、華やかなのよりも、寧ろ濫きを愛する風となつた。

外來文化は一たび應神朝に渡來し、二たび欽明朝に輸入され、その後引續き將來されて奈良時代の文化となり、平安時代に入つて

(一) 足利義政が東山に銀閣を營んで大いに藝術を奨励した。この頃、繪畫、彫刻、書藝、茶藝、花道、能楽、山吹、など、東山文化といつてゐる。

恬淡

これを同化し、その後室町時代に入つて來た新文化は、江戸時代に至つてこれを同化し、明治に至つて更に西洋文化の傳來があつて、その勢は滔々として極るところを知らざる状態である。欽明朝に於ける外來文化は、いづれも紀元を劃してゐるもので、我が國文化史上の最も重要な時代である。一體我が文化史は、殆ど外來文化史で、外來文化があつて、その後これを同化する時代がある。しかし、また更に新外來文化があつて、次に同化時代がくる。けれど要するに、從來の外來文化は東洋文化であつたから、多少とも共通した點もないではなかつた。然るに明治以後に傳來された外來文化に至つては、全然出發點も開展の途も異なつてゐる。西洋文化であるから、我が文化はここに一大變革に出會つたのである。殊に交通の不便であつた古代と、彼我交通の容易で頻繁である今日とでは、その文化渡來の程度が違ふ。山鳴り谷應へるが如く、彼の思想文物は我

軍閥主義

に反響を與へる。曾てはフランスの自由民權思想が盛に輸入された。續いてドイツの軍閥主義が渡來して、我が國を軍閥化させた。歐洲大戦争以後改造の聲が盛になつて、我が國に於ける思想界は空然の動搖を受けつゝある。とにかく明治以後傳來した外國文化と従前のものとは非常な相違があつて、衣食住が全然異なると同じく、物質的に、精神的に非常な徑庭が存在してゐる。随つて我が國民がこれより受ける影響の多大なことはいふまでもない。

—日本繪畫史—

三〇 おどろの下

みかど始り給ひてより、八十二代に當りて後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成。これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。修理大夫信隆のぬしの女なり。治承四年七月十五日に生まれ

大
カ
イ
フ
コ
ウ
ノ
ミ
カ
ド

(一)安徳天皇

(二)高倉天皇

(三)高倉院

(四)高倉天皇の第三皇子惟明親王

らうたし

させ給ふ。その年の春の頃、建禮門院后宮と聞えし御腹の第一の御子、三つになり給ふに位を譲りて、帝はおり給ひにしかば、平家の一族のみ、いよいよ時の花をかざしそへて、華やかなりし世なれば、掲焉にももてなされ給はず。またの年、養和元年正月十四日に、院さへかくれさせ給ひにしかば、いよいよ位などの御望あるべくもおはしまさざりしを、かの新帝平家の人々にひかされて、遙かなる西の海にさすらへ給ひにし後、後白河の法皇、御孫の宮たちわたし聞えて見奉り給ふ時、三の宮を次第のまゝにも思されけるに、法皇をいといたう嫌ひ奉りて泣き給ひければ、あなむづかし。とて、おてはなち給ひて、四の宮ここにいませ。とのたまふに、やがて御膝の上に抱かれ奉りて、いと睦まじげなる御氣色なれば、これこそ眞のうまごにおましけれ。故院の兒生ひにも、まみなどおぼえ給へり。いとらうたし。とて、文治元年御年六つにて位に即かせ給ひけり。

およぐ

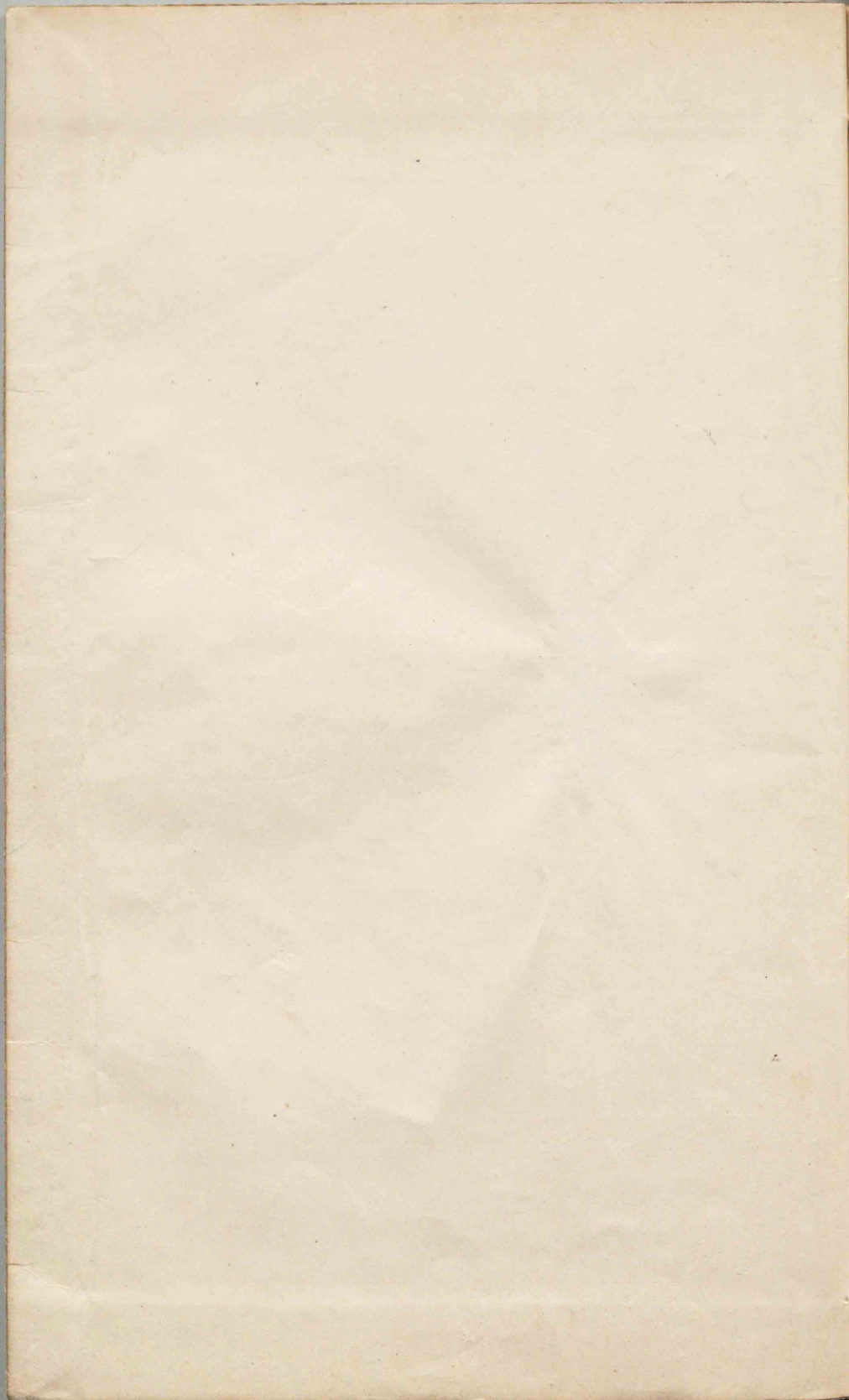
帝いとおよぎて賢くおはしませば、法皇もいみじうつくし
 と思さる。文治二年十二月一日、御書始させ給ふ。御年七つなり。建
 久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。同じき三年三月十三
 日に、法皇かくれさせ給ひにし後は、帝ひとへに世を知ろしめして、
 四方の海波静かに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り、民安くして、あま
 ねき御うつくしみの浪、秋津島の外まで流れ、しげき御惠、筑波山の
 かげよりもふかし。よろづの道々にあきらけくおはしませば、國に
 才ある人多く、昔に耻ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なん
 優れさせ給ひける。御歌かずしらず人の口にある中にも、
 おく山のおどろの下もふみわけて
 道ある世ぞと人にしらせん
 とはべるこそ、政事大事と思されけるほどしるく聞えて、いとみ
 じくやんごとなくははべれ。

(一)土御門天皇。

建久九年正月、第一の御子四つになり給ふに御位ゆづり申させ
 給ひて、おりぬ給ふ位におはしますこと十三年なりき。けふあす二
 十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所
 せき御有様よりは、なかなかやすらかに、御幸など御心のまゝなら
 んとにや。世を知ろしめすことは今もかはらねば、いとめでたし。

鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて、常にわたり住まはせ給
 へど、なほまた水無瀬といふ所に、えもいはずおもしろき院づくり
 して、しばしば通ひおはしましたつ、春秋の花もみぢにつけても、御
 心ゆく限り世をひかして遊をのみぞし給ふ所がらも、はるばる
 と川に臨める眺望、いとおもしろくな。元久の頃、詩に歌を合はせ
 られしにも、とりわきてこそは。

見わたせば山もとかすむ水無瀬川
 ゆふべは秋となに思ひけん



一、		二、		三、		四、	
1	2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31	32
33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48
49	50	51	52	53	54	55	56
57	58	59	60	61	62	63	64
65	66	67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78	79	80
81	82	83	84	85	86	87	88
89	90	91	92	93	94	95	96
97	98	99	100	101	102	103	104
105	106	107	108	109	110	111	112
113	114	115	116	117	118	119	120
121	122	123	124	125	126	127	128
129	130	131	132	133	134	135	136
137	138	139	140	141	142	143	144
145	146	147	148	149	150	151	152
153	154	155	156	157	158	159	160
161	162	163	164	165	166	167	168
169	170	171	172	173	174	175	176
177	178	179	180	181	182	183	184
185	186	187	188	189	190	191	192
193	194	195	196	197	198	199	200

第四學年五學級

乃美靜美

